



C S 伝道的目標

放出教会
小山 恒雄

C S 伝道は、息の長い伝道です。しかし、まかぬ種は生えぬという言葉も事実です。明治の初め以来、私たちの国は先進国の仲間入りをし、「和魂洋才」ということを国是のようにして、文盲者の殆どいない義務教育の普及した国家を築き上げて来ました。しかるに今日、幼児の拉致^{ほうし}はあとを絶たず、進学塾での女子児童の殺害さえ起きるに至っては言つ言葉がありません。

羽仁もと子女史は「神の存在を認めない人は精神的な欠落者である」という意味のことを書いておりますが、この異教社会である日本になんとかのような種類の人が多いことでしょうか。

米国20代目の大統領となったガーフィールドが小学生の時、クラスの担当教師が生徒に質問しました。「皆さんは大きくなったら何になりたいですか」。彼らはそれぞれ「政治家に、軍人に、医師に、教師に、…」と応えましたが、最後に「ガーフィールド君、お前は何になりたいかね」と尋ねると「はい、僕は人間らしい人間になりたいです」と答えたといひます。

聖書は一人の人間を全人的に取り扱っています。テサロニケ人への第一の手紙5章23節に「霊（ブニーマ）と心（ブスケー）とからだ（ソーマ）とを完全に守って」と人間の三重性を教えています。今日の日本では、体育や知育には大きな関心が持たれ、その点では非常に進んでおりますが、全く顧みられていないのは人間の存在の至聖所と

も言つべき「霊」への配慮の問題の靈育で、これこそC S 伝道目標でなければなりません。

心に欲することは何でもしてみたソロモン王にして、彼は人生の結論を次のように論じました。「事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である」（伝道の書12・13）。

知者ソロモン王の人生の結論を出発点とすることができたなら、何と素晴らしい人生でしょうか。ソロモン王はその同じ章の初めに「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」（伝道の書12・1）と勧めます。

もう一人の偉大な老人の告白に耳を傾けましょう。カーライルは晩年、友人につくづく告白しました。「私は年を取ると共に永遠の世界の入り口にあることを実感するが、子どものとき学んだウエストミンスター大教理問答書の第1条の文がしきりに私の脳裏に帰ってくる。いわく『人の主たる目的は何であるか。人の主たる目的は神の栄光をあらわし、かつ永遠に神と親しむことである』と」。まさにC S 伝道は家庭でも、学校でも、社会でもなし得ない事業なのであります。

「事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である」。

（伝道の書12・13）

牧羊者

目次

巻頭言.....	1
教師養成講座 旧約聖書丸ごと早わかり(1).....	3
復活の主《4月教案》.....	9
教会の準備《5月教案》.....	24
教会の誕生《6月教案》.....	36
牧羊ひろば（芦屋川教会）.....	48
おわりに.....	50

教師養成講座

旧約聖書丸ごと早わかり(1)

藪野 潤一

はじめに

これから旧約聖書について学んでいきます。私が担当するのは創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記です。

まず、この五書について学ぶ前に、いくつかのことをお話ししておきたいと思っています。第一は聖書の中心的メッセージです。それは、神様の救いです。新約聖書において、それはイエス様によって成就しました。旧約聖書ではそのことを約束し、計画しています。

第二は、聖書の構造についてです。これは先の聖書の中心的メッセージと関連がありまして、新約も旧約も三つの区分に分けることができます。これは聖書を神様の救いの歴史として理解することによります。すなわち、旧約では、神様の救いのご計画が過去・現在・未来にわたって記されています。第二区分が歴史で、創世記からエステル記までの17の書は過去の歴史に重点が置かれています。第二区分は現在で、ヨブ記から雅歌までの五書は個人の現在の経験に焦点を合わせています。第三区分は未来で、イザヤ書からマラキ書までの17の書は未来の預言に重きを置いています。

最後に、旧約39巻の名前と順番を覚える方法についてです。これには『ふくいん子どもさんびか』(日本児童福音伝道協会) 19番の「聖書めいもくずくし」を用いると便利です。メロディーは「鉄道唱歌」(♪汽笛一声新橋を♪)です。

創・出・レビ・民・申命記

ヨシユア・士師・ルツ・サム・列王

歴代・エズ・ネヘ・エステル記

ヨブ・詩・箴言・伝道・雅歌

イザヤ・エレ・哀・エゼ・ダニル

ホセア・ヨエ・アモ・オバ・ヨナ・ミ

ナホム・ハバクク・ゼパ・ハガイ

ゼカリヤ・マラキ三九

それではこれから「創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記」について学んでいきましょう。

I 創世記

創世記の著者はモーセです。創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記をモーセ五書といいます。創世記は歴史物語という形式の最古の歴史です。その目的は全人類にわたる歴史を示すことです。

なく、人類の救いに関することを示すことです。

創世記ははじめの書です。すなわち、世界のはじめ、人間のはじめ、罪のはじめ、そして神様の救いのご計画のはじめです。

(分解)

1 創造(1:1-2:3)

神様は空と海と地を造られました。神様は植物や動物や魚や鳥を造られました。神様は人をご自分のかたちに造られました。私たちは時々、人から尊敬を払ってもらえないことがあります。しかし、私たちは神様のかたちに造られたのですから、威厳があり、価値があることをしっかりと心にとめましょう。

2 アダム(2:4-5:32)

① アダムとエバ

② カインとアベル

③ アダムの子孫

アダムとエバが神様に造られたとき、二人には罪がありませんでした。ところが、二人が神様に従わないで、木の実を食べたとき、罪を持つようになったのです。以来、人間は罪の下に置かれました。そして、罪の破壊的な力と苦い結果を体験しているのです。

人間はいつも選択に直面します。神様のご計画に従わない方を選ぶことが不従順です。人は悪を行うことを選びました。聖書の中の偉大な人物でさえ、神様の前に失敗し、神様に従わなかった時

があるのです。

神様に従わない時、罪は起ります。罪は人の命を損ないます。神様との関係の回復の道は神様に従うことです。神様の約束の恩恵にあずかる唯一の道は神様に従うことです。

3 ノア (6・11・11・32)

①洪水

②新世界の住民

③バベルの塔

ノアは神様に従って箱舟を造り、洪水によるさばきから免れることができました。神様がノアとその家族を守られたように、神様はご自分に信頼する者をお守りくださいます。

4 アブラハム (12・11・25・18)

①ひとつの国民とするとの約束

②アブラムとロト

③ひとり子を与えるとの約束

④ソドムとゴモラ

⑤イサクとリベカ

⑥アブラハムの死

アブラハムは父の家を離れるように命じられたとき、彼は神様に従い、カナンの地を行き巡りました。子どもが与えられるとの約束を長い間待ち、その長年待つて与えられた子どもを全焼のいけにえ(燔祭)としてささげよと神様に命じられたときにも彼は従いました。これらの試みを通して、アブラ

ハムは神様への信仰を持ちました。彼の生涯は信仰者の生涯とはどういうものかを示す手本です。

5 イサク (25・19・28・9)

①ヤコブとエサウ

②イサクとアビメレク

③イサクの祝福を奪うヤコブ

イサクは自己主張をしませんでした。彼は犠牲としてささげられそうになったときにも逆らわず、結婚する際にも選んでもらいました。イサクは自分の計画、自分の願いにまさって、神様の御旨を優先したのです。

6 ヤコブ (28・10・36・43)

①ヤコブの家族

②ヤコブの帰郷

ヤコブはあっさりとききめらるような人物ではありませんでした。彼はおじのラバンに長年仕えました。彼は神様と格闘しました。たしかに、彼はたくさんのおちを犯しました。しかし、その勤勉さを見るべきものがあり、これこそ主に対する奉仕者の姿を示します。

7 ヨセフ (37・11・50・26)

①売られて奴隷になったヨセフ

②ユダとタマル

③投獄されたヨセフ

④エジプト王(パロ)の信頼を得たヨセフ

⑤兄弟との再会
⑥ヤコブ一族のエジプト移住
⑦ヤコブとヨセフの死
ヨセフは兄たちに売られてエジプトで奴隷になり、さらにはその主人により投獄されました。彼の生涯は苦難が続きましたが、それによって彼のうちに不屈の性格が形成されていきました。

II 出エジプト記

神様の選びの書が創世記なら、神様の救いの書が出エジプト記です。神様は選ばれた民イスラエルをエジプトの圧制から救出され、ご自分のために聖別されます。

本書の著者はモーセです。彼の一生は120年で、その生涯は40年ずつ3つに分けることができます。第一はエジプトでの40年。モーセはエジプトでパロの娘の子として育てられ、当時の最高の教育を受けました。彼は自分がひとかどの人物であるかのように思っていました。

第二は荒野の40年。彼はエジプトから逃れてミデアンの荒野で家畜を飼いました。そこはまた神様の学校ともいえるべきところで、自分が取るに足らない者であることを学んだのです。

第三は指導者としての40年。神様から使命が与えられて、イスラエルをエジプトから導き出して、約束の地へと導くという大事業に携わりました。彼は、神様が取るに足りない者を用いて、いかに

大いなるみわざをなされるかを身をもって学びました。

(分解)

1 エジプトにおけるイスラエル

(1:1~12:30)

- ① エジプトでの奴隷生活
- ② 神に選ばれたモーセ
- ③ パロのもとにつかわされたモーセ
- ④ エジプトに下されたさばき
- ⑤ 過越

イスラエルは40年間エジプトで奴隷の状態でした。残忍なエジプト王(パロ)はイスラエルを圧迫しました。彼らはエジプトの苦役から解放されることを切に祈りました。神様は彼らの叫びをお聞きになり、モーセを指導者としてお立てになりました。神様は力あるみわざによってイスラエルを救い出されました。確かに、神様はご自分の民の叫びをお聞きになります。神様はイスラエルをエジプトから解放なさったように、私たちを罪と死と悪から救い出してください。

2 荒野におけるイスラエル(12:31~18:27)

- ① 出エジプト
- ② 紅海を渡る
- ③ 荒野でのつばやき

神様はイスラエルをエジプトから導き出されました。神様は信頼できる導き手です。神様には奇跡をなさる力がありますが、通常は知恵ある指導

者や集団の努力によって導いておられます。神様のことは知恵を与えてくれます。

しかし、紅海を渡った後、イスラエルに争いをつばやきが起りました。イスラエル同様、私たちもすぐに不平、不満をならべます。クリスチャンはこの世では闘いがあります。しかし、困難でいやな状況にあっても、神様への信頼を失ってはなりません。

3 シナイにおけるイスラエル(19:1~40:38)

- ① 与えられたおきて
- ② 幕屋建設の指示
- ③ 破られたおきて
- ④ 幕屋の建設

神様はシナイにてイスラエルにおきてを与えられました。おきては三部で構成されています。第一部は十戒で、そこでは霊的、道徳的生活の絶対性が述べられています。第二部は市民生活に関するおきてで、日常生活を管理するための規則が掲げられています。第三部は儀式にかかわるおきてで、幕屋の建設や礼拝のささげ方などを示しています。

神様はイスラエルに選択と責任の重要性を教えられました。すなわち、おきてに従うならば、彼らは祝福を受けました。しかし、おきてを忘れたら、おきてに従わなかったりすると、罰や災いを受けたのです。現在、世界の多くの国々の法律は出エジプト記に記されている神様のおきてに基づ

いて制定されています。

神様は世界に対する真理と救いの源としてイスラエルを選ばれました。エジプトを脱出したとき、彼らには軍隊も、学校も、知事も、市長も、警察もありませんでした。そのために神様は彼らにおきてを与え、日々の訓練を施されました。また、神様は記念日をどのように祝って、過ごしたらよいのかを教えられました。

おきてを通して、神様がどのようなお方で、イスラエルの行末をいかに期待しておられるかということを知ることができます。おきては今も私たちを教えます。なぜなら、おきては罪をあばき、神様が望んでおられる人生を示してくれるからです。

III レビ記

レビ記という名称は、本書がレビ族に属する祭司とレビ人の奉仕や彼らによってささげる犠牲などに関する律法を記していることによります。

祭司やレビ人はイスラエルの人々を礼拝を通して指導しました。彼らはいわば当時の牧師だったのです。彼らは道徳生活や市民生活や犠牲に関するおきてが正しく行われているかどうかを見守り、人々に助言する神のしもべでした。

本書の中心思想は聖です。聖とは分離すること、神様のものとなることを意味します。あがない主が聖い方であられるので、あがなわれた者も聖でなければならぬことが強調されています(レビ

11・45、19・2、20・7、21・8)。かつて神様はご自分の民をエジプトから分離されました。いまや神様はご自分の民からエジプトを分離されます。すなわち、エジプト流の生き方や考え方から神様が示される生き方や考え方に方向転換しようとされるのです。

罪深い人間が神様に近付き、神様と交わり、神様を礼拝するためには、犠牲の血が流されることを必要としました。「血は命であるゆえに、あがなうことができる」からです(レビ17・11)。

(分解)

1 聖い神への礼拝(1・1～17・16)

①ささげものに関するおきて

②祭司に関するおきて

③人に関するおきて

④祭壇に関するおきて

犠牲には五種類ありましたが、その目的は二つです。一つは神様への賛美、感謝、献身をあらわすためです。もうひとつはあがない、すなわち罪をおおい、罪を除くためです。動物の犠牲をささげることは、神様に自分の命をささげることを示します。犠牲は礼拝と罪のゆるしのためです。犠牲をささげることにより、人は罪の代価ということを知ったのです。人は自分で自分の罪をゆるすことができないからです。命には命をもって、これが神様のご要求です。人は犠牲を通して、罪の深刻さと、罪のゆるしを願うために神様に近づくことの重要さを学んだのです。

旧約において動物の命は人の命を救うために犠牲となりました。しかし、これはイエス・キリストの死によって人間の罪が完全にゆるされるまでの代替でした。

神様は種々の礼拝についての詳しい指示を与えられました。これらの指示は神様のご性質を教え、礼拝に対する正しい姿勢を育むためです。

2 聖い生活(18・1～27・34)

①人が守るべき基本的なおきて

②祭司の規定

③季節と祭り

④祝福を受けること

神様はイスラエルに聖い生活を送るための明確な基準となるべきおきてを与えられました。隣人愛について、性に関して、食物について、偶像礼拝について等等。それはイスラエルを周囲の偶像を拝む諸民族から分離し、区別するためでした。また、7つの祭日が宗教的、国民的祝日として設けられました。それらの日を通して、祝賀と献身の中に神様を礼拝することを身をもって学んだのです。

IV 民数記

本書はイスラエルの荒野での遍歴を記した書です。さまざまな出来事が記録されていますが、その中で「青銅のへび」(21・4～9)、「ヤコブの星」

(24・17)といった救い主の模型や預言が示されています。創世記には、墮落した人間と、それにもかかわらず神様に選ばれた人間が、出エジプト記にはあがなわれた人間が、レビ記には礼拝する人間が、そして本書には奉仕する人間が描かれています。

本書にはイスラエルの数々の失敗が記されていますが、その原因は不信仰です。それは、①神様のことばに対する非難です。

神様が「そうだ」と言われたのに、イスラエルは「ちがう」と言い、神様が「そうする」と言われたのに、イスラエルは「なさらない」と言ったのです。②神様の権能への非難です。

イスラエルはすでに神様の力あるみわざを見てきましたが、神様に信頼し、神様に期待することができませんでした。

③神様の善意に対する非難です。

神様はこれまでに限らない愛を注いでイスラエルを導かれました。ところが、カナンを目前にして彼らは神様の愛が尽き果てたかのように言ったのです。

(分解)

1 旅の準備(1・1～10・10)

①最初の人口調査

②レビ人の役割

③宿営の聖別

④旅の指図

モーセはイスラエルの人口調査を二度行いまし

たが、最初の調査により、イスラエルは防御のために有効な部隊に編成されました。大きな働きが成功するためには、人は組織され、訓練されなければなりません。大事業を始める前にコストを計算するのは賢明なことです。障害に気がつけば事前に回避することができるようになります。

さて、旅の準備は神様がイスラエルに宿宮の聖別に関する明確な指示をお与えになることから始まりました。神様はイスラエルが周辺の民族に同調することを望まれず、彼らの生き方、考え方が諸民族とは異なることを求められました。神様はイスラエルが聖なる民であることを望まれたのです。

2 約束の地への最初の働きかけ

(10・11～14・45)

①人々のつばやき

②ミリアムとアロン、モーセを非難する

③カナンを偵察した者が反抗を煽る

カデシにて十二人がカナンの地に送られ、彼らはかの地を偵察しました。彼らが帰ってきたとき、そのうちの十人はカナン侵入をあきらめて、エジプトにもどるべきだと報告しました。その結果、イスラエルは約束の地、カナンに入ることを拒みしました。問題に直面して彼らは神様にそむいたのです。反逆は暴動によって始まりませんでした。それはモーセと神様への不平、不満、つばやきとなつてあらわれたのです。神様への反逆は深刻な事態です。それは軽く受けとめるべきではありません。

せん。罪に対する神様の罰は非常に厳しいものであることを覚えるべきです。反逆は全面的な戦争でもって始まるとはかぎりません。むしろ、巧妙なやり方で、たとえば不平、不満を言ったり、相手を非難したりすることで始まるのです。

イスラエルは不信仰のために約束の地に入ることを妨げられました。歴史を通して神の民は不信仰と戦い続けてきました。不信仰が日常生活に足場を築くことがないように、それを防がなければなりません。不信仰によって、神様が約束された祝福を享受できなくなるからです。

3 荒野をさまよう (15・1～21・35)

①追加された規則

②指導者たちがモーセに反抗する

③祭司とレビ人の義務

④新しい世代

イスラエルが神様に対して不満をもらし、モーセを非難したとき、彼らはきびしい罰を受けました。1万4千人以上の人がモーセに反抗したために死んだのです。コラの反逆の結果、コラとダタン、アビラム、そして彼らの家族は、コラに加担した250人の祭司と共に死んだのです。もし不平や不満を胸のうちにとどめておくと、容易に破滅への道が開かれます。指導者に不平を言い、非難することは慎まなければなりません。

反逆のゆえに、イスラエルは40年間荒野をさまようこととなります。このことは、いかに神様が

罪をきびしく罰せられるかを示すものです。40年はエジプトの習慣や価値観が染み込んでいる人々が死に絶えるのに十分な時間でした。そして、40年はまた新しい世代を神様の道に歩むように訓練するために要した時間でもありました。

4 約束の地への二度目の働きかけ

(22・1～36・13)

①バラム

②二回目の人口調査

③ささげものに関する指示

④ミデアン人への復讐(ふくしゅう)

⑤ヨルダンの東にとどまった部族

⑥モアブの平野にて

モアブ人とミデアン人はバラムを用いてイスラエルを呪って陥れようとしたが、できませんでした。しかし、どうしたらイスラエルを偶像礼拝に引き込むことができるかという手がかりを得ました。バラムは何が正義であるかを知っていません。しかし、彼は物質的な報酬の誘惑に負けて、罪を犯しました。正しいことを知っていることは、それだけでは決して十分ではありません。正しいことを行わなければならないのです。

カナンは約束の地です。そこは神様がアブラハム、イサク、ヤコブに約束された契約の地です。カナンは神の民がまことの礼拝のために分かたれて住むべき地です。神様の罪に対する罰はきびしいものですが、神様は回復と希望を備えていてくだ

さいます。神様の愛は本当に驚くべきものです。イスラエルを約束の地に導いたのは神様の愛でした。

V 申命記

本書は服従の書で、中心思想は従順です。本書の元来の意味は「第二の律法」です。それはまったく新しい律法ではなく、39年前にシナイにおいて与えられた律法が回顧され、説明されているのです。エジプトを出てきたふるい世代の人々は、カレブとヨシユア以外はみな荒野で死んでしまいました。そのため、新しい世代の人々に律法を示す必要があったのです。

本書の著者はモーセで、彼の死を記した最後の記事は後継者ヨシユアによると言われています。

本書はモーセ五書の最後の書です。創世記は人の創造と墮落、出エジプト記は血によるあがない、レビ記はきよめと礼拝、民数記は歩みと失敗、申命記は福音的約束を教えています。

(分解)

1 神がなされたこと―モーセの最初の説教

(1:1-4:43)

モーセは、イスラエルをエジプトの奴隷状態から解放してくださった神様の力あるみわざを回顧しました。彼は、いかに神様がイスラエルをお助けになったか、またいかにイスラエルが神様に従わなかったかという点を数え上げました。神様の約束と力あるみわざを回想することにより、神

様のご性質を知ることができます。神様がこれまでなさったことを理解できれば、神様をもっと深く知ることができるようになります。また、イスラエルが犯した失敗を学ぶことにより、人生で過ちを犯すことから守られます。

2 聖い生活の原則―モーセの第二の説教

(4:44-28:68)

- ①十戒
- ②あなたの神、主を愛すること
- ③まことの礼拝についてのおきて
- ④民を治めることについてのおきて
- ⑤人間関係についてのおしえ
- ⑥従順と不従順の結果

神様とイスラエルの間の契約は、約束の地に入ろうとしている新しい世代の人々によって更新される必要があります。神様への信仰は自動的に、機械的に引き継がれるものではありません。それは新しい世代、またその世代の各人が自らの体験を通して、自覚して継承されるものなのです。

神様のおきてに従うことでイスラエルは祝福を受けましたが、従わないときは祝福を受けることができませんでした。神様への従順あるいは不従順は、必ず今の生活と後の生活に影響を与えます。

3 使命遂行の召し―モーセの第三の説教

(29:1-30:20)

モーセはイスラエルが使命を遂行するように呼

びかけました。神様は心をつくし、思いをつくし、力をつくして、ご自身を愛するようにと呼びかけておられます。

神様の真実で忍耐深い愛は、神様のさばきよりもはるかに頻繁に聖書に描かれています。神様はイスラエルに対して、彼らへの約束に対して真実であられることにより、愛をお示しになりました。神様は、イスラエルが形式的におきてを守るというような愛ではなく、心の底からご自身を愛する愛を求めておられるのです。

神様は、契約を批准するためには、服従の道を選ばなければならないことをイスラエルに念を押されました。神様に従うことを決断すれば、人生に祝福がもたらされます。しかし、神様にそむくならば、きびしい災いがもたらされます。選択如何で人生は変わるのです。神様に従うことを選ぶなら祝福を受け、人間関係も祝福されます。しかし、神の道を放棄することを選ぶなら、自分も他人も傷つける結果をもたらします。

4 指導者の交替―モーセの最後

(31:1-34:12)

神様はイスラエルの子どもたちに神の道を教えるように命じられました。確実に神様と神様の教えを理解できるように教育が施されました。神様の真理を次の世代に伝えることは重要です。

モーセはいくつかの重大な誤りを犯しましたが、彼は高潔な生涯を送り、使命を果たしました。

聖書 ヨハネ13・1～20
テーマ 足を洗う

序論

(鎌野)

新しい年度は、「教会とともに」を年題としている。まず第一期は「愛」を中心として展開されるが、今月は、受難週・イースターを迎える時期でもあるので、十字架の前後の出来事に焦点をあてよう。今週は有名な洗足の箇所である。ヨハネは、13章から、「愛」「愛する」という語を頻繁に用い始める。特に十字架刑の前後、エルサレムの二階座敷での主の言動が記されている17章までには特に多い。だから1節は、この箇所全体の序言とも言える。主がユダも含めた12弟子たちの足を洗われたのには、三つほどの目的があった。

一、真の愛を示すため

〈最後まで〉と訳されている語は、「残るところなく」(新改訳)、「この上なく」(新共同訳)とも訳される。その生涯の終わりの時に、最高の愛を示されたのである。この直前、弟子たちは「だれがいちばん偉いだろうか」(ルカ22・24)と言って争っていたのだ。彼らはすでに3年ほど主と共に生活しながら、真の愛を理解していなかった。真の愛は、〈神から出てきて、神にかえろう〉としているお方が、弟子たちの足下にひざまずいて、彼らの足を洗うところに表されている。バックストンは、4節5節の主の姿を、天の位から立ち、栄光を脱ぎ、卑しい人間の姿をまとい、血潮を流し、贖罪の結果を告げられたことと比較して

描いている(『ヨハネ伝講義』234頁)。それこそが真の愛、アガペーの愛である。

この行動の前に、〈悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうとする思いを入れていた〉と記されていることに注意したい。たとい、自分を裏切ろうとしている者の足さえも洗うことができるのが、真の愛である。ところがユダは、主が自分の足を洗っておられる間にも、悔い改めようとはしなかった。

二、真の関係を示すため

このユダとは対照的に、自分の番になったとき、ペテロは〈わたしの足を決して洗わないで下さい〉と言った。主を一番愛していると自負していた彼らしい言葉だが、実は主の思いを正しく理解していなかった。そこで主は、〈もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなく〉と仰せられた。主が足を洗ってくださる姿に感動し、涙を流して主の愛を受け取ることこそが、主の求められる姿なのである。洗足は、これから主がなされる罪の贖いのわざと密接に結びついている。主が私たちの罪を洗い流そうとしておられるのに、それを受け取らないなら、主との正しい関係は成り立たない。

あわてたペテロは、〈では、足だけではなく、どうぞ、手も頭も〉と言った。これに対する主の答えを見よう。〈すでにからだを洗った〉という動詞は全身の洗いを意味するが、〈足のほかは洗う必要がない〉という時の「洗う」は部分的な洗いを表す別の用語である。つまり、主のみ言葉に

よって罪赦され、神の子とされた者は〈全身がきれい〉(15・3)。しかし、日常的な汚れについても無頓着であってはならず、それを告白してきよめられねばならない(1ヨハネ1・9)。これこそが主イエスと弟子たちの真の関係であり、現代に生きる私たちにも不可欠なことである。

三、真の手本を示すため

主は、全員の足を洗われた後、〈わたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである〉と言われた。だれが偉いかと争うのではなく、かえって謙遜に他人に仕える姿こそ、主が身をもって示された弟子たる者の倣うべき手本なのだ。主は、今もこのように生きる者を求めておられる。

しかし、〈わたしのパンを食べている〉親しい者が、自分を裏切るという現実があることも、主はご存じであった。どんなに手本を示しても、それに反する者がいることは、昔も今も変わらない。だが主の手本に従う者は、その後2千年間、絶える事はなかった。主はそういう人々を、〈わたしがつかわす者〉と言ってくださり、彼らを受け入れる者は、主イエスと父なる神を受け入れる者と認められてきたのである。

結論

私たちも人の足を洗う者となろう。自分を憎む人の足であっても。これは、主と密接な関係をもたなければできないことではない。私たちが主の見本に倣うとき、子どもたちもまた変えられる。

研究資料

(足立)

福音書記者ヨハネにとつて主イエスの死が中心的な位置を占めていたことは明らかである。ヨハネ福音書の13―19章に主イエスの十字架前後と十字架の出来事が記されている。このことは主イエスの全生涯が12章(1―12章)、十字架に至る24時間以内に7章(13―19章)、そして復活に関して2章(20―21章)と、福音書の記録を割り振っていることからわかる。以上のことから強調点がどこにあるかは明白で、ヨハネは私たちに中心の出来事が何かを読み誤らせない。

テキスト

1 過越の祭の前に 過ぎ越しというテーマは本福音書の至るところで展開されてきた(2・13、23、6・4、11・55、12・1、参照18・28、39、19・14)。主イエスは弟子たちを最後の晩餐の席で洗足に招き入れた。これは世の罪を取り除く神の小羊として、主イエスご自身を究極の過ぎ越しとして見越してのことであった(1・29)。父のみもとに行くべき自分の時 今まで来ていなかったが、天の父によって決定された主イエスのクライマックスの時(例2・4、7・8)。すなわち十字架に架かる時。彼らを最後まで愛し通された 1―12章でヨハネは愛という名詞と愛するという動詞を9回使っているが、13―17章においてはそれらを30回使用している。つまり愛がこの一連の出来事を支配するテーマである。

2 イスカリオテのユダがどういう理由で主イエスを裏切るに至ったかは十分に説明されていない。しかし、聖書は悪魔がユダの心に主イエスを

裏切る思いを入れたと記している。

3 1節ですでに表現されている内容が繰り返されている。すなわち主イエスが自らに対する天の父のみこころを十分承知しているということ。ここでは二つの重要なことが付加されている。主イエスが世を去る自分の時が来たというだけではなく、自分は神から出てきてということ、そして父がすべてのものを自分の手にお与えになったことを知っていた。

4―5 上着を脱ぎ、手拭を腰に巻き、人の足を洗い、手拭で足を拭くことは、奴隷のする仕事であった。しかも異邦人の奴隷のすることであつて、ユダヤ人奴隷には免除されていた。それほど卑しい奉仕を主イエスが弟子たちにしたのである。ここで特に重要な点は、主イエスがユダの足を洗ったという事実である。主イエスはユダが自分を裏切る過程の中にあつたことを知っておられたが、主イエスはユダの足を洗うことを止められなかった。このことは真に主イエスの弟子になりたい人々は、奉仕の受け手がそれに値しないからといって自分の行ふ奉仕を止めてはならないことを意味している。真の主イエスの弟子は、自分の氣に入らない人にも仕えるのである。主イエスはユダをも愛していた。

6―7 疑いなく弟子たちの全員は主イエスがなさった洗足によって、深く当惑させられたであろう。そして彼らのたいていの者たちは、沈黙を余儀なくされたであろう。そこでペテロがその沈黙を破って尋ねた。あなたがわたしの足をお洗になるのですか。しかし主イエスは彼に信仰によって洗足に服従することを求めた。弟子たちはまだ救い主は十字架につき、崇められるべきお方だと

理解していないので、十字架を予表する象徴的行爲(洗足)を受け止められない。ペテロと他の者たちは後に理解することになる。

8―9 わたしの足を決して洗わないで下さい。ペテロの態度は彼の性格上力強いものが感じられる。彼は主イエスの提示をはね除けているが、その意味するところが何であるかがわかっていない。もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる。主イエスの洗足の行為には象徴の意味がある。主イエスは特別な食事の席だから足を洗うことに意味を待たせているのではない。主イエスはまさに死のうとしており、ご自分の民をきよめるために贖罪の犠牲として死ぬのである。主イエスが死んでもたらすべきよめを受けることなくして、キリストのものとなる方法は他にない。もし主イエスが十字架の血潮によって私たちを洗ってくださらなければ、私たちは主イエスとの関係はもてない。弟子たちの足を洗うことは主イエスの行為による譬えであつた。私たちは自分自身の努力によって救いを獲得することはできない。しかしキリストはご自身に信頼するものすべてをきよめ、私たちを罪から解き放ち、キリストの救いに招き入れてくださる。一度キリストの救いに与った者は、汚れた部分だけを洗ってもらえば良い(参照、1ヨハネ1・9)。足は当時最も汚れた部分であつた。そこを洗うとは、私たちの最も汚れた心を主イエスは十字架できよめることの象徴。日々自分の罪を認め、告白し、十字架を仰ぐ者は幸い。

参考文献 Carson D.A. The Gospel According To John (Bermans). Morris L. Reflections on the Gospel of John (Baker).

4月

2日 研究資料

聖書 ヨハネ13・1～20
 タイトル 足を洗う
 暗唱聖句 あなたがたもまた、互に足を洗い合すべきである。ヨハネ13・14
 目 標 イエス様にならって互いに愛し合え合おう。

導入

(松浦)

ピカピカの新学期を迎えましたね。冬の間、冷たい真つ暗な土の中で過ごした球根は、「春が来たよ、ヤッター」って、ぐんぐん成長しきれいな花を咲かせています。私たちの気持ちもうきうきしますね。でも、今日はちょっと悲しいイエス様の地上最後のお話をします。

最後のお食事会

3年間12人のお弟子さんたちは、イエス様と一緒に色々なところを旅したり、さまざまなお話を聞いたり、聞いたこと、教えられたりして思い出さばいの日々を過ごしてきました。しかし、イエス様には分かっていた。今日のこのお食事会が弟子たちと一緒に食べる最後の食事なのだということが。イエス様は自分が死んでいなくなっても愛する弟子たちの心にしっかりと自分を刻みつけるために、ある事をしようと固く決心しておられました。それは一体何だったのでしょうか。

足を洗うイエス様

イエス様は最後のお食事の席で、弟子たちが驚くようなことをなさったのです。弟子たちがいつまでもいつまでもイエス様の心を忘れないで思い出そうように。

イエス様は突然席を立ち上がり、上着を脱ぎ、手拭いを腰に巻きつけられました。それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って腰に巻いた手拭いで拭き始められました。イスカリオテのユダが自分を裏切ることもご存知でしたが、愛を込めてユダの足も洗われました。ペテロの番になった時、ペテロは慌てて、「わたしの足を洗ってもらうわけにはいきません」と言いました。しかし、イエス様は「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたとわたしは無関係になつて、あなたはわたしに従うことはできません」と言いました。「それなら、手と頭も洗ってください」と言うので「すでに体を洗った者は、足の汚れを洗う必要はないのだよ」と言つて、ペテロの足も洗われました。イエス様は弟子全員を洗い終わつてから、上着を着て元の席にもどり、「わたしをしたことがわかるか」と尋ねました。主であり、先生であるのに、僕（しもべ）の姿をして、イエス様は身をもつてお手本を示してくださいましたのです。それは、弟子たちが互にへりくだりの心を持ち、愛の心で助け合つて生きていくようにとのメッセージがこめられていたのです。

お母さんの残した絵本

ある一人のお母さんのお話をしましょう。このお母さんもイエス様のようにもうすぐ自分は死んで愛する子どもたちとお別れをしなければならぬ時が近づいていることを知っていました。年令は36才で9才と7才の男の子のお母さんでした。乳がんにかかり命が助からないと分かった時、ひとつの事を決心しました。絵本を書く、そして子どもたちにお母さんの心を残しておこうと、ペンを握りました。そのお話はこうです。森に住む

ウサギたちはすてきなポケットのついた上着を着ています。このウサギの国では誕生日になるとお母さんが上着にポケットを縫い付けてそこに大切なプレゼントを入れてくれるのです。プレゼントは子どもの成長に合わせて考え抜かれたものが毎年贈られます。初めての誕生日には歯を一生大切に使えるようにと小さな歯ブラシ、2才になると自分で顔が洗えるようにと真つ白のタオル、4才になると砂遊びの赤いスコップ、7才になると友だちがいっぱい作れるようにとオレンジ色のボールがプレゼントされます。成長に従つて、毎年愛情と知恵に満ちた贈り物がポケットには入れられ、自分を内省するようにと日記帳、神の愛と人への愛を知つて欲しいと聖書が贈られます。19才の誕生日には大きなリュックサックが、「これからは、自分で大切なものを見つけて入れるのよ」と贈られるのです。子どもの心のポケットに祈りと願いのこもった愛を与えている絵本です。子どもたちは母の死後もいつまでもこの愛のプレゼントを忘れないことでしょう。

『ポケットのなかのプレゼント』

柳澤恵美、ラ・テール出版局

まとめ

イエス様の最後の食事会での出来事は、いつまでも弟子の心に刻み込まれ、今を生きる私たちにも受け継がれているのです。私たちもイエス様にならって、互に足を洗い合い、助け合つて生きる者となりましょう。

♪神のお子イエスさま♪

(ふくいん子どもさんびか74)



聖書 ヨハネ19・23～30
テーマ 愛弟子へ

序論

(鎌野)

二階座敷での長い説教と祈りを終えられた後、主はゲッセマネの園へ行き、そこで逮捕される。そして夜通しで裁判を受け、金曜日朝、十字架につけられた。この十字架上で主は7つの言葉を語られたが、その内の3つが今週の個所に記録されている。これを聞き、書き記したのは〈愛弟子〉(26節)と言われているヨハネだろう。彼だけは他の弟子と違って、十字架のそばにいた。主はここで、愛する弟子(そして私たち)が知るべき重要な事実を示されたのである。

一、聖書の預言の成就

十字架の周囲には、かなり多くのローマ兵たちがいたであろうが、直接に主を十字架にかけた兵卒たちは4名だったと思われる。彼らは主の〈上着をとって四つに分け〉た。しかし、下着は〈一つに織ったもの〉であり、裂くと値打ちがなくなるので、〈だれのものになるか、くじを引こう〉と言った。彼らが自分の欲のためにしたこのことを、聖書はその千年も前に預言していた(詩篇22:18)。単にこのことだけではない。詩篇22篇だけを見ても、主の十字架上での経験が、まるで目撃していたかのように預言されている。その他、創世記3:15やイザヤ53章など、救い主の受難の預言は、枚挙にいとまがない。

弟子たちがこの事実気づいたのは、多分、十字架・復活、そしてペンテコステの後だと思われる。そのとき、彼らは主が本当に神の子であることを確信した。だからこそ、あれだけ大胆に主を証できたのだ。二階座敷で、主が「あとでわかるようになる」(13:7)とか、「聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、…思い起させるであろう」(14:26)と言われたのは、旧約聖書の預言とのつながりを見いだすことを意味していた。

二、新しい家族の形成

主の十字架のそばには、4人の婦人がたずんでいた。嘲笑する4人の兵卒たちとは対照的に、彼らは深い悲しみに沈んでいた。特に、母親の痛ましい姿を見られた主は、〈婦人よ、ごらんさない。これはあなたの子です〉と言ひ、また愛弟子のヨハネには、〈これはあなたの母です〉と仰せられた。神の子である主イエスは、3年ほど前、カナの結婚式ですでに示されたように、マリヤを単なる母親とは考えておられなかった。しかし、肉体を生み出してくれたマリヤのことを無視されていたのではない。あの時と同様、〈婦人よ〉という丁寧な言葉で彼女を励まし、弟子のヨハネに託されたのである。

ここに、新しい家族関係を見ることが出来る。血のつながりがある者だけが家族なのではない。主イエスを信じる信仰によつて、新しい家族が形成される。ペンテコステの時に誕生した教会は、まさにそういうものだった。だから、教会は神を父とする「神の家族」であり(エペソ2:19)、お互いのことを兄弟姉妹と呼び合うのである。

三、救いの計画の完成

釘づけられた主の身体からは、血が流れ出していた。主が〈わたしは、かわく〉と言われたのも当然である。これも、詩篇69:21の成就だった。主がそう言われたのは、〈今や万事が終ったことを知つて〉である。主は、当時、気つけ薬として用いられていた酸いぶどう酒を受けた後に、再び〈すべてが終った〉と言われていることに注意したい。これは、「もうこれで何もかもおしまいだ」とか、「これでわたしの苦しみも終わった」などという意味ではない。主イエスのなすべき使命が完了し、全人類の救いという神の計画が完成したこと、の宣言なのである。罪人が受けるべき罰を、主がすべて身代わりとなって受けられたからこそ、もはやだれも神の罰を受ける必要がなくなった。救いの計画は、ここに完成したのである。

その後、主は〈息をひきとられた〉。これは直訳すると「霊を引き渡す」という意味で、ルカ23:46と同じ内容である。主の命は、人によって奪われたのではない。使命を果たされた主は、自ら自分の霊を父なる神に委ねられたのである。

結論

2千年前の十字架で、人類の救いは完了している。それならば、人間が何かをつけ加える必要は全くない。ただ単純に受け取るだけでいいのだ。「手のものを、みな地におきて、清水かな」(小島伊助)。主は今も私たちすべてを愛して、以上の事実を聖書を通して示してくださっている。これを単純に信じ、神の家族の一員に加わろう。

研究資料

(足立)

ヨハネは主イエスが十字架に架けられている間に起こった事柄に注意を向けている。またこのことは他の福音書が触れていない情報を含んでいる。ヨハネは主イエスを十字架につける職務を課された兵士たちから始める。普通、人びとは裸で十字架刑に処せられ、その職務を執行した兵士たちが役得として犠牲者の衣服を分けることを慣例としていた。ヨハネは外套と下着を区別し、縫い目のない下着がくじ引きにされたことを記している。

また十字架刑は公共の場で行われた。権威者たちは人びとがこれを見るように仕向けた。理由は民衆が法を尊重し守るための警鐘であった。そのため人びとは難なく十字架の周りに集まることができた。この場合主イエスに従う者たちは、あまりにも近寄ることは身に危険を感じていたのかも知れない。マルコによれば女性たちは距離をおいて立っていた(マルコ15・40)。これは十字架刑の終わりに近い。しかしヨハネは十字架の場面の中ほどに、しかも十字架の近くにたえずむ女性たちを伝えている。

そして主イエスの十字架刑に男性の弟子が立ち会ったことを記すのは、本福音書だけである。主イエスはこの弟子に母マリヤをゆだねる。主イエスの兄弟たちは、この時点ではまだ主イエスを信じていなかったと考えられる(参照7・5)。本福音書で母マリヤが登場するのはカナの婚礼以来(参照2・4、19・27)。主イエスの栄光の時、十字架の事実において実現している。

テキスト

28―29 主イエスの地上生涯の目的がまさに差し迫っていた。福音書記者ヨハネが使ったことば**すべてが終わった**(テテレスタイ)により、この事実が際立っている。すなわち主イエスの生涯に意図されたゴールが到来したのであった。事実この3節(28―30)の中には、同様の動詞が3回も使用されている(終った、全うされる、終った)。またこれらの動詞は17章の大祭司の祈りの要約にも2回出てくる(17・4、23)。主イエスの栄光を意図した時は、ついに完全に成就した(参照12・23、17・1)。

マルコ15・23によると、主イエスは最初没薬を混ぜたぶどう酒(十字架刑の激痛を軽減すること「が目的」)を口にすることを拒否された。しかし、ここで彼の体は何かを飲むことに欲していた。それで彼は叫んだ、**わたしは、かわく**。そして著者ヨハネは、主イエスの言ったことばに**聖書が全うされるためであった**と結びつけている(参照、2・22、13・18、15・25、17・12、18・32、19・24、28、36、37、20・9)。しかしながらこの記述が何を意図し、成就への言及が何であるか明示されてはいない。詩篇の22・15、または詩篇69・21が候補として考えられる。或いは特定のみ言葉を念頭に置いていたのではなく、数多くのメシヤ預言を漠然と指しているのかも知れない。けれどもヨハネは主イエスの生涯が栄光の時を指し示すよう記述してきた(参照、2・4、11、12・27―28、等)。従ってこの記述は痛みの十字架に架かる文脈の中で、また詩篇にある苦しみの言及の光によって理解されるべきものであろう。

酔いぶどう酒

とは、おそらくぶどう酒から作った酔を水で薄めたもので、古代ローマ兵の飲み物(参照マルコ15・36)。ヒソブとはヒソブ草の茎を束にして、ユダヤ人がきよめの儀式に使ったもの(例、レビ記14・4―7、民数記19・18)。これに海綿をつけぶどう酒を含ませ、主イエスに差しだした。

30 主イエスはぶどう酒を口にした後、まさに死なれた。ヨハネは、主イエスが死ぬ前に語った十字架上の最期のことばを記録している。そのことばは**終った**(テテレスタイ)。他の三人の福音書記者は、主イエスが死ぬ直前に大声で叫ばれたと記しているが(マタイ27・50、マルコ15・37、ルカ23・46)、ヨハネは発声の仕方には言及していない。テテレスタイとただ一言。主イエスは天の父のみこころを完全に成就してみわざを完成し、大勝利を認識された。このことばは完成したキリストのみわざを表現するものとして、教会史とキリスト教神学を通して響き渡ってきた。パウロとヘブル書の著者は、主イエスの死はすべての人のために一度起こったと宣言している(ローマ6・10、ヘブル7・27、9・12、10・10)。首をたれて**息をひきとられた**これはまさに主イエスが完全に死なれたことの描写である。この死は、あらゆる時代にわたって、神に敵対する罪人のために救いがもたらされたことを意味するものだった。

参考図書

山下正雄「ヨハネの福音書」『実用聖書注解』(いのちのことば社)・Borchert G B John 12―21 (Broadman)・Kostenberger A J John (Baker)・Morris L, Reflections on the Gospel of John (Baker) .

4月

9日 礼拝メッセージ例

聖書 ヨハネ19・23～30
タイトル 愛弟子へ
暗唱聖句 ごらんなさい。これはあなたの母です。 ヨハネ19・27
目標 苦しみの中も母を思うイエス様の愛を知る。

導入

今週は受難週というとても大切な一週間です。それは、イエス様がエルサレムに入城されてから十字架につけられて亡くなられる日まで、地上最後の一日一日の足跡を偲ぶ一週間だからです。特別に受難週早天祈禱会を守ったり、克己献金をする教会もあります。

苦しみは預言されていた！

イエス様は不思議な方です。皆さんはクリスマスを知っていますね。クリスマスはイエス様の誕生日です。イエス様が生まれる何百年も前から、どここの町で、どういう人から、どんな風に男の子として生まれるのだと、預言されていました。それだけでなく、どんな風に死ぬかということも何百年も前から預言されていたんです。驚いたことにイエス様が着ていた服をくじ引きで人々が取っていくことまでもね。へえっ、そんなの信じられないと思うでしょう。でも、旧約聖書には詳しく、いったいイエス様のことが書いてあるのですよ。イスラエルの王ダビデは、詩篇22・18で「わたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引にする」と預言しました。そのようにイエス様が十字架にかけられた時、兵卒たちは上着を四つに分け、下着

をくじ引きしました。預言者イザヤもイエス様の死がどんなに苦しく、悲惨なものか、まるで見たかのように預言しました。その預言のとおりイエス様は十字架にかけられました。『パッション』という映画を見た人はいるでしょうか。イエス様の最後の一週間が描かれた映画です。

十字架の上のことは

イエス様は十字架の上で7つの言葉を語られました。①父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。(ルカ23・34) ②よく言うておくが、あなたはききょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう。(ルカ23・43) ③婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です。ごらんなさい。これはあなたの母です。(ヨハネ19・26～27) ④エリ、エリ、レマ、サバクタニ(マタイ27・46、マルコ15・34) ⑤わたしは、かわく(ヨハネ19・28) ⑥すべてが終わった(ヨハネ19・30) ⑦父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます。(ルカ23・46) 本日のテキストの箇所には③⑤⑥の3つのことばが書かれています。イエス様は苦しい十字架の上で、自分を産んで育ててくれた年老いた母マリヤに語りかけられました。「お母さん、自分はもうすぐ死んでしまいますが大丈夫ですよ。これからはヨハネが自分の母として共に歩んで助けてくれますよ」と。ヨハネはイエス様の温かくてやさしい心を知って、このとき以来自分の家に母マリヤを引き取って一緒に生活するようになりました。苦しみの最中に自分に語られたイエス様の思いやりに満ちたやさしいことばに、マリヤはどんなに勇気づけられ、励まされたことでしょう。ここにイエス様にあって新しい家族関係が築きあげられました。血はつ

ながっていきなくてもイエス様にあって新しい家族とされるのです。主にある兄弟姉妹なのです。もし一人っ子の人がいたなら、教会にはお兄さん、お姉さん、弟、妹がいると思って仲良くしてくださいね。

完成した救い

イエス様の両手、両足は、十字架に釘付けられポタポタと血が流れ落ちていました。6時間もの長い間流れ続けていたのです。ですから、最期には体中の水分はなくなり、激しい渇きの中から「わたしは、かわく」と言われました。その後、人々がさし出した酔いぶどう酒を受けてから「すべてが終わった」と言われ、首をたれて息をひきとられたのです。終わったというのは、完成したという意味です。完成したということは、繰り返す必要がない、やり直しの必要もない、他の何の助けもない、ないということですね。イエス様によって完全無欠な全人類の救いが完成したのです。なんとすばらしいことでしょう。

世の中の多くの人々は、イエス様の救いを知らないために難行苦行をしたり、様々な努力をして救いを求めています。しかし、イエス様を信じ、私たちの心にイエス様をお迎えするだけで、すべての罪は赦され、一度も罪を犯したことがない者のように主の前に立たせてくださるのです。御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめてくださるのです(1ヨハネ1・7)。ハレルヤ、感謝です。さあ、イエス様をひとりひとり心の心にお迎えして歩んでいきましょう。(教会学校せいか48)



聖書 ヨハネ20・1～18
テーマ 復活の朝

序論

(鎌野)

ヨハネ福音書は多くの点で共観福音書と違いがあるが、復活の記事も同様である。これは、復活の事実を否定するものではない。かえって記者たちが口裏を合わせたりせず、自分が見たこと、聞いたことをそのまま書いたという明確な証拠である。一例を挙げると、共観福音書は墓に行ったのは複数の女性だと記しているが、この書ではマグダラのマリヤだけのようになっている。これは彼女の証言をそのまま書いたからである。しかし2節末尾の直訳「私たちにはわかりません」(新改訳・新共同訳参照)は、複数の者がいたことを示唆している。今週は、マリヤの行動を中心にして、復活の朝におこった出来事を調べてみよう。

一、彼女が見たこと

マリヤは、〈墓から石がとりのけてあるのを見た〉。そこで、ペテロと〈もうひとりの弟子〉(多分ヨハネ)とに知らせた。二人は墓にやってきて、〈亜麻布がそこに置いてあるのを見た〉が、主の姿が見あたらないので、帰って行った。だがマリヤはそこに残り、泣きながら墓の中をのぞくと、〈ふたりの御使が…すわっているのを見た〉。さらに、〈うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た〉。このように、彼女は幾つかの事実を見たが、泣き悲しむ彼女に復活の主を気付かせるものではなかったのである。

今でも多くの人々が、「神を見せろ。そうしたら信じる」と言う。けれど、本当にそうだろうか。1週間後、主は疑い深いトマスに現れ、「見ないで信ずる者は、さいわいである」と仰せられた(20節)。見るということは、必ずしも主の復活を信じる根拠とはならないのである。

二、彼女が気づいたこと

主イエスはマリヤに、〈女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか〉と尋ねられたが、それでも彼女は主を園の番人だと勘違いしていた。しかし、主が〈マリヤよ〉と彼女の名前を呼ばれたとき、初めてこの人物が主であることに気づいたのである。彼女は、「自分の名前を園の番人が知っているはずがない。知っているのは…」と考えたに違いない。確かに、良い羊飼いである主イエスは、「自分の羊の名をよんで連れ出す。…羊はその声を知っているのだから、彼について行くのである」(10・3～4)。マリヤは主に気付かなくても、主は彼女を知っておられ、名を呼ばれた。彼女も、それが主の声だと気付いたのである。

マリヤはふり返って〈ラボニ〉と呼び、嬉しさの余り主のからだにさわるうとしたが、主は「わたしにさわってはいけない」と言われた。「昔のわたしにしたような接し方をしてはならない」という意味であろう(レオン・モリス『ヨハネ福音書』84頁[英文])。主のからだは霊のからだに変えられており、昇天に備えておられたのである。

現代の私たちは、主の復活の姿を見ることはできないので、復活を信じるのはなおさら難しいこ

とである。しかし、主は今も生きて私たちの名を呼んでくださることに気付きたい。聖書は、〈わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ〉と明確に約束している。(イザヤ43・1)。

三、彼女が伝えたこと

さらに主はマリヤに言われた。〈わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとに上って行く〉と、彼らに伝えなさい」と。「わたし」と「あなたがた」との間に区別をつけておられるのは、霊のからだに変えられたお方として、当然のことであろう。マリヤもまた、人間としての情から考えると、復活の主とずっと共にいたかっただけに違いないが、そこを離れ、〈弟子たちのところに行つて、自分が主に会ったこと、…自分に仰せになったことを、報告した〉。ちょうど、来週学ぶエマオの途上の二人の弟子たちと同じように(ルカ24・35)。

復活の主と出会った人々は、いつまでも主と共にいたのではないことに注意したい。彼らはその後には必ず、主とお会いしたことや主の言葉を他の人々に伝えたのである。彼らはみな、主の復活の証人であった(使徒2・32、3・15)。

結論

2千年前のイースターの朝におこった出来事は、主の復活を信じる人と、信じない人とに世界を二分した。あなたはどちらに属するか。復活を信じ、それを伝える者になろうではないか。

研究資料

(足立)

四つの福音書には主イエスが死者の中から復活した出来事に関して、見事な一致がある。詳細においては違いが見受けられるものの、各著者が復活というテーマに各自のアプローチをとり、記念すべき朝に起こった出来事を生き生きと伝えようとした故と説明できよう。福音書記者ヨハネが記したストーリーは他の福音書に見受けられるものではない。彼はルカによるエマオ途上の記録、マタイによる主イエスが墓から離れた女性たちに出会った記事、或いはマルコによる白い衣を着た青年が女性たちにガリラヤにいる主イエスに会いに行くよう伝えた言及にはふれていない。各著者は復活の朝の重要な事柄を自らの理解で捉え、各自の方法で伝えている。

テキスト

1 他の福音書と同様ヨハネは、週の初めの日と言う言及(参照: マタイ28・1、マルコ16・2、ルカ24・1)で主イエスの復活を説明し始める。マルコは時を「早朝、日の出のころ」(16・2)と言っているが、ヨハネは「朝早くまだ暗いうちに」と記している。他の福音書は複数の女性を列挙させているが、ヨハネはただひとり「マグダラのマリヤ」に焦点を当てる。彼女が墓に到着した女性団の第一番目だったかも知れない。彼女は主の十字架の側にいた女性たちのひとり(19・25)。マリヤが墓に行った理由は明言されていない。マルコによれば、それは未完成に終わった葬りを完成させるため(16・1)。彼女は、墓から石がとりのけて

あるのを見た。パレスチナにある墓は岩を切って作られたものであり、普通数トンもある円い石で閉じられる。入り口を開けるには、数人が力を合わせなければできない。マルコによればマリヤは墓の入り口に石が転がし置かれたのを見ていた(マルコ15・46―47)。ところがその石が動かされていた。マタイは御使いが女たちに語りかけたことを伝え(マタイ28・5)、一方マルコは彼女たちが墓に行くこと、白い衣を着た青年が彼女たちに話しかけたことを伝えている(マルコ16・5以下)。ルカも彼女たちが墓に入り、輝く衣を着たふたりの男性に出会ったことを記している(ルカ24・3―4)。しかしヨハネはこれらに関して何も言っていない。

2 マリヤは最初に「ペテロとイエスが愛しておられた、もうひとりの弟子のところへ」行った。主イエスを裏切った後でさえ、なおペテロは弟子たちの間でリーダー的存在である。もうひとりの弟子(参照18・15―16)。主イエスが愛しておられた者(参照13・23―24、19・25―27)。だが、主を墓から取り去りました。残念ながらこの段階でマリヤには、主イエス復活の発想はない。どこへ置いたのか、わかりません。原文を見ると動詞が一人称複数であるので、私たちにはわかりません(新改訳)、となる。ここからマリヤが他の女性たちと一緒に墓に来ていたと考えられる。

3―5 二人の弟子は墓に向かって走り出した。ここでは、もうひとりの弟子の優位性が目立っている。彼が最初に墓に着いた。彼は身をかがめて、墓の中に亜麻布を見た。埋葬の時主イエスの死体はアリマタヤのヨセフとニコデモによって亜麻布で巻かれ(19・38―40)、そして墓に納められた

(19・42)。もうひとりの弟子がのぞき込んだとき、彼が見たのは亜麻布だけで、主イエスの体ではなかった。中へはいらなかった。彼が墓の中に入らなかった理由が何かはわからない。

6―7 遅れてペテロが墓に到着したが、彼はその中に入った。ペテロがそこで見たものは興味深い。イエスの頭に巻いてあった布は亜麻布のそばにはなくて、はなれた別の場所にくるめてあった。埋葬の説明に関して(19・38―41)頭に巻いた布への言及はないものの、それは死人の顔を覆うために用いる普通のものであった(11・44)。ここでの主要ポイント、主イエスの体がなかったと言うこと。それは敵に持ち去られたのではない。つまり主イエスの復活の体は布(物質)を通り抜けると言うこと。主イエスが復活したとき、彼を包んでいた布や埋葬の衣類は単に残された。

8―10 先に墓に着いたもうひとりの弟子もはいってきて、これを見て信じた。見て、信じるとは、本福音書にある中心主題である(2・23、4・48、6・30、36、40、20・8、25、27、29)。ここでは、何を信じたのかは明記されていない。9節から考えると、マリヤが言ったように墓が空であることを信じたのであろう。ルカによれば、復活の主ご自身が弟子たちの心の目を開いてくださったって初めて、彼らは復活信仰に立てた(ルカ24・25―27、30―31、44―46)。

参考図書

山下正雄「ヨハネの福音書」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、Borchert G, John 12―21 (Broadman), Kostenberger, A. J., John (Baker), Kruse, C. G., John (Eerdmans), Morris, L., Reflections on the Gospel of John (Baker)。

聖書 ヨハネ20・1～18

タイトル 復活の朝

暗唱聖句

イエスはよみがえって、まずマグダラのマリヤに御自身をあらわされた。

マルコ16・9

目 標 主を愛するマリヤに一番にあらわれたイエス様は生きておられる！

導入

(松浦)

イースターおめでどう！きれいに色づけられた卵をプレゼントしましょう。卵を温めると中からひよこが産まれてきます。見たことがありませんか？もし、チャンスがあればぜひ卵がかえってひよこが産まれるところを見てください。新しい命の誕生は「感動」のひとつだと思います。

うそのような本当のこと

十字架で死なれたイエス様はその後、どうなったのでしょうか。アリマタヤのヨセフという人がイエス様の死体を引き取りに行きました。また、ユダヤ人の指導者のニコデモは死体に塗る薬や香料をたくさん持って来てくれました。そこで、ユダヤの習慣にしたがって葬りの作業をし、亜麻布をまいて、イエス様の死体を新しい墓に納めました。そして、大きな大きな石をころがしてふたをしました。また、誰かがイエス様の体を持ち出さないようにと兵隊たちも見張りに立ちました。もうぜったい墓は開けることはできません。ところが、日曜日の朝早く、まだ暗いうちにマグダラのマリヤが墓に行ってみると、どうしたことでしょう。大きな墓石が取りのけてあったのです。どうして

石が取りのけられたのか、わかる子はいるかな？マタイによる福音書だけに、その秘密が書かれているんだよ。それはね、グラグラっと大きな地震が起って、主の使いが天から降りてきて石をわきへころがしたのです。見張りの兵隊たちも恐ろしさに震えあがつてバツタンキューと気を失って倒れてしまいました。マリヤは墓石がとりのけてあるのを見て、「大変です！」と、ペテロとヨハネに知らせました。驚いた二人が墓に来て見ると確かにイエス様の姿が見当たりません。ただ亜麻布が置いてあるだけです。また頭に巻いてあった亜麻布は別の場所にくるめて置いてあったのです。

マリヤはイエスに出会った

マリヤは途方にくれて泣いていました。そして泣きながら墓の中をのぞいてみると、白い衣を着た二人のみ使いがイエス様の死体の置かれていた場所に座っていました。御使いは、マリヤに「なぜ泣いているのか」と言いました。「だれかがわたしの愛する主を取り去りました。そして、ここに置いたかわからないのです」。そう言って後ろを振り向くとイエス様が立つておられるのを見ました。しかし、マリヤは気づかず園の番人だと思つて、「もしあなたが死体を移したのでしたら、どこに置いたか教えてください。わたしが引き取りますから」と言いました。するとその人は、「マリヤよ」と答えました。マリヤはその声にハッとしました。なつかしいイエス様の声ではありませんか。「ラボニ（先生）」と叫び、思わずイエス様の体にさわろうとしましたが、「わたしにさわってはいけない」と言われました。マリヤは気づきませんでした。イエス様はマリヤのことをちゃ

んと知っておられて名前を呼んでくださったのですね。「わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのものだ」（イザヤ43・1）。聖書には私たち一人ひとりの名が覚えられ、呼ばれると約束されています。うれしいですね。

マリヤは立ち上がって証した

マリヤは復活の主に出会ったこと、また、イエス様が「父なる神様のものとにのぼっていくことを伝えなさい」とおっしゃられたことを弟子たちの所に行つて報告しました。弟子の中には、信じて喜んだ者も、そんなばかげたことがあるものかと言つて疑った者もいましたが、マリヤは復活の証人として人々に伝え続けました。

まとめ

死は決して終わりではありません。私たちの教会員で現在77才の佐藤義男兄は十代で兄、父、母と死別されました。しかし、みんなクリスチャンとして亡くなりました。兄は「義男君、また天国で会いましょう」。父は「立派な人にならなくてよい。世の人がなると言つてもイエス様を忘れずに生きていきなさい」。母は「お母さんは神様の御許にまいます。一番心残りなのはあなたたちがきちんと神様を信じて毎日を過ごしてくれることよ。神様はいつも共にいてくださるからね」。義男兄は天国で会えることを確信しつつ歩んでおられます。

ハレルハレル♪

(ふくいん子どもさんびか48)



聖書 ルカ24・13〜32
テーマ 燃える心

序論

(鎌野)

女たちや11弟子、また彼ら以外の多くの人々も、復活の主にお会いしたときに、すぐに信じることはできなかった。今週学ぶ〈ふたりの弟子〉もそうである。その一人の名は〈クレオパ〉(ヨハネ19:25のクロバと同一人物か?)で、もう一人は彼の妻だと思われる。彼らも、最初は復活の主に気付かなかった。しかし、主が彼らと話されたゆえに、失望の中に沈んでいた彼らの〈心が内に燃えた〉のである。彼らがこのように変えられていったプロセスを、先週学んだマリヤのことも思い出しながら探ってみよう。

一、主は彼らに近づかれる

ふたりの弟子は、多分、エマオにある自分たちの家に帰る途上だったのだろう。そこに〈イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた〉。しかし、マリヤと同様、彼らは〈イエスを認めることができなかった〉。また、〈悲しそうな顔をして〉いた。そしてこの数日、エルサレムで起った事件について話し始めたのである。その語り口は、〈力ある預言者でした〉、〈望みをかけていました〉、〈イエスは見当りませんでした〉とみな過去形であり、失望の色がありありと見える。女たちが伝えた御使の知らせも、〈『イエスは生きておられる』と告げたと申すのです〉と、半信半疑の受け取り方だった。

そんな不信仰な彼らに、主ご自身の方から近づいて来られたことに注目しよう。これもマリヤの場合と同じである。不信仰な者だからこそ、主は近付いて来られるという原則は、2千年前も、そして現在も変わらない。

二、主は聖書を説きあかされる

主は、彼らの話を黙って聞いておられたが、ついに口を開かれた。〈預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか〉と、〈モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた〉。先々週も学んだとおり、メシヤの苦難は何度も預言されているし、復活についての預言も繰り返されている(研究資料参照)。ふたりの弟子たちは、かなり詳しく旧約聖書の内容を知っていたのだろう。一つ一つにうなずかざるを得なかった。

〈説きあかす〉と訳されているギリシャ語は、英語の「解釈学」(hermeneutics)の語源となった言葉である。旧約聖書は過去の古びた記録集ではなく、この時代の出来事に密接につながっていることを、主が彼らに解釈されたとき、彼らの〈心が内に燃えた〉。今もこの原則は不変である。私たちが聖書の言葉を読む場合、それを単なる過去の出来事として受け取るなら、現状は変わらないだろう。しかし復活の主は今も生きておられ、主の言葉を正しく理解させてくださると信じるなら(ヨハネ14:26)、心は燃えるのだ。

三、主は一緒にいてくださる

主は、ふたりの弟子と一緒にエマオの近くまで歩いて来られた。それだけではない。〈わたしたちと一緒に泊まり下さい〉と言う彼らの願いに答えて彼らの家にとどまられ、彼らと〈一緒に食卓につかれた〉。そして〈パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった〉。彼らが数日前の「最後の晩餐」の席にいたとは思えないが、以前にどこかでパンをさく主の姿に接していた可能性は大きい。主と一緒にいる時間が長いなら、霊の目は開かれるのである。これも古今を通して変わらない重要な原則であろう。

私たちは、彼らと同じように、主を〈しいて引き止め〉、〈一緒に泊まり下さい〉と求める者だろうか。「泊まる」という動詞は、ヨハネ15章で何度も用いられている「つながる」と同じ原語であることにも注意したい。主と一緒にいることを切に求めるなら、目が開かれ、復活の主を見いだすことができるのである。そして、主が共におられることがわかったなら、たとい〈み姿が見えなくなつた〉としても、心は燃え続け、この知らせを伝えるために、今来た道をわざわざエルサレムまで戻る力がわき出てくるのである。

結論

たとい不信仰な自分であっても、主は近付いてくださる。み言葉を受け入れ、復活の主が今も共におられることを信じよう。そのとき、私たちは「燃える心」をもって主に仕えることができる。

研究資料

(石田)

今日の聖書箇所には、イエスが復活したその日の夕方、二人の弟子たちに現れたことが記されている。この日、弟子たちに現れた順序は、マグダラのマリヤに（マルコ16・9～11、ヨハネ20・11～18）、ヤコブの母マリヤとサロメに（マタイ28・9、10）、ペテロに（ルカ24・34）、エマオ途上の二人の弟子に、二弟子に（ルカ24・36）。以上、5回である。

テキスト

13 ふたりの弟子 このうちの一人の名前はクレオバ（男性）である（18）が、もうひとりのほうはだれであるかは特定できない。33節から11弟子でないことは確かである。古来より、あえて名前を挙げていないので著者であるルカであるとか、二人が家に招いているのでクレオバの妻であるとか考えられて来た。誰であるにせよ、クレオバの名前が挙がっているのは、ルカが彼から直接話を聞いたからであろう。エマオという村へ行きながらエルサレムを離れて行くからにはエマオにふたりの弟子の家があったとも考えられる。

14 このいっさいの出来事について互に語り合っていた その内容は19～24節に記されていることで、救い主として期待していたイエスが十字架で死なれたことに打ちのめされ、甦ったという報告を聞いても戸惑うばかりで、信じられないという状態である。

15 イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に

歩いて行かれた 甦ったイエスの方から姿を現さなければ、彼らは信じる事ができなかったであろう。イエスは今も私たちが信じる事ができるために、聖霊によって近づいてくださっている。彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった イエスが以前と別の容貌で現れたわけではなく、ふたりの弟子たちの魂の状態に問題があったことを示している。マグダラのマリヤも同様であった（ヨハネ20・15）。死人が甦ることなどありえないという固定観念に支配され、三日目に甦るというイエスの約束の言葉も思い出せないでいる。イエスは彼らを「愚かで心のにぶい」者と言っている（25）。

17 歩きながら互に語り合っているその話は、なんのことなのか この質問は、イエスを失って途方にくれている彼らの心のうちを語り出すきっかけとなった。イエスは相手の心の状態が整えられるまでは、真理を説き明かしたりしない。19 それは、どんなことが イエスはさらに二人の心の思いが明らかになるように質問を重ねている。ナザレのイエスのことです。弟子同士の間ではこういう呼び方はしないが、話す相手が弟子ではないと思ったので、こういう一般的な呼び方をした。

21 イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました イエスが死んでしまったので、希望が打ち砕かれた。彼らの希望とはイエスが自分たちをローマの支配から解放してくれるという政治的なものだった。彼らは十字架の死こそ救いの完成であることをまだ知らない。

24 イエスは見当りませんでした イエスのから

だが墓からなくなっていたことは弟子たちの証言から疑いようがない。弟子たちはイエスが甦ることなど全く念頭になかったため、彼らがイエスのからだをどこかへ隠す必然性も全くない。またローマ兵による厳重な封印と警備を破ろうとする者は一人もいなかった。それなのに墓にはイエスのからだが無かったのは、イエスが甦ったことの動かぬ証拠である。

25 ああ、愚かで心のにぶいため… 同情を込めた叱責の言葉である。

27 聖書全体にわたり：説きあかされた イエスは、自分の死と復活が「聖書全体」、つまり旧約聖書を貫いて預言されていること、それが成就したことを教えようとした。

29 しいて引き止めて言った 無理に願い、せがみ、袖を引くかのように懇願して言った。

30 パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに この振る舞いは、イエスが5千人にパンを分け与えたとき、弟子たちと食事をしたとき、特に最後の過ぎ越しの食事のときと全く同じだったのであろう。

31 彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった イエスが復活して今、目の前にいることがわかった。すると、み姿が見えなくなったイエスのみ姿は、信仰と聖書によって見るべきことを示している。

32 お互の心が内に燃えたではないか 失望と落胆の境地から、希望と確信がわいてきた。

参考文献 『新聖書注解』、『ウエスレアン聖書注解』、『新約聖書注解』（マクドナルド）など。

聖書 ルカ24・13～32
タイトル 燃える心
暗唱聖句 イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。
ルカ24・15
目標 復活の主は今も共に歩いてくださることを信じる。

導入

(松浦)

冬季オリンピックがイタリアのトリノで開催されました。テレビで応援した人もいるでしょう。スポーツは選手自身もそうですが、応援する私たちも一緒に心燃える思いを持つことができますね。皆さんはどうでしょうか。サッカーのワールドカップで、シュートが決まった時、テレビの前で「ヤッター!」と声をはりあげたという経験はありますか。

旅するふたりに近づかれる主

イエス様が復活された日、エルサレムから11kmほどはなれたエマオという村に向かって旅するふたりの弟子がおりました。ひとりの名はクレオパと言いました。ふたりは、イエス様の復活の様子について話し合いながら歩いていました。「女たちが墓に行ってみると、イエス様の死体がなかったなんて信じられない話だね」「みんながうわさするように、誰かが盗んでいったかもしれないよ」こんなことを話しながら歩いていると、イエス様が近づいてきて、ふたりと一緒に歩いて行かれました。しかし、ふたりはイエス様だと気づきません。「何のことを話しているのか?」と共に歩きながら聞いてくる旅人に

向かって、「あなたは先ごろエルサレムで起ったあの騒ぎを知らなかったのですか」「それは一体どんなことか」と尋ねるので、「ナザレのイエスのことです。あの方はわざにも言葉にも力ある預言者でしたが、十字架につけられて殺されたのです。ところが、三日目の今朝早く仲間の女たちが墓に行くと、死体が見当たらないのです。途方にくれていると、み使いが現れ『イエスは生きておられる!』と告げたと言うのです。そんな世にも不思議な話、信じられませんよね」。ふたりは口をそろえて「わたしたちはイスラエルを救うのはこの方であろうと望みをかけていたのに」と、ため息をつくばかりでした。

聖書全体を説き明かされる主

そこで、失望と不信仰で心がぶくなくなっているふたりの弟子に、イエス様はモーセや預言者たちのことからはじめ、聖書全体にわたって、イエス様について記してある事どもを一つづつ説き明かされました。「キリストは必ず苦難を受けて後、復活する、とはつきり預言され、弟子たちにも語っていたはずですよ」。そんな話をしながら歩いて行くとエマオ村に着きました。ふたりはまだ一緒に旅する人がイエス様だと気づきません。「旅のお方、もう夕暮れになってしまいましたし、話も尽きる事はありません。今夜は私たちと一緒に泊まりください」とお願いすると、そうしようということ、家に入り、食卓を囲みました。

気づいたふたりが経験したこと

夕食の席についたとき、パンを取って祝福の祈りをささげて、ふたりに渡しているうちに「あつ」とふたりの目が開きました。と同時に「イエス様!」と気づいた瞬間、その姿は見えなくなりました。ふ

たりは互いに、「そういえば、道々話されたとき、また聖書全体を一つ一つ手にとるように教えてくださった時、心が燃えて熱くなったね」「イエス様はよみがえられたのだ。イエス様は生きておられるのだ!」。ふたりは大きな喜びで胸も張り裂けんばかりでした。一刻も早くみんなに知らせようと、もと来た道を走ってエルサレムに帰って行きました。内に燃えた熱い心は真っ暗な夜道もなんのその、良きおとづれを告げる者の足として走らせ、この事実を宣べ伝えさせたのです。

心燃やされたジョン・ウエスレー

メソジスト生みの親といわれるジョン・ウエスレーは、1703～1791年、今から300年前にイギリスで活躍した人です。ウエスレーは毎日聖書を読み祈ることを実行していましたが、ほんとうの救いと心の喜びについては知りませんでした。あるとき乗り合わせた船が嵐に合い、もう沈むばかりです。しかし、ドイツのモラビア派の人たちはどんな嵐の中も主を賛美し平安そのものです。心打たれたウエスレーは、その後交わりをもつようになり、1738年5月アルダース街で開かれた小さな集会に出席しました。神様はイエス様を信じる信仰をとおして、私たちの心に働きかけてくださる、という言葉聞いた時、自分の心に不思議な変化が起こったことに気づきました。心の中が暖かくなり、何ともいえない喜びが湧き上がってくるのです。35才の出来事でした。心の底からイエス様を信じた時以来、内に燃える火は消えることなく死ぬまで燃え続けたのです。

♪主に従い行くは♪
(教会学校せいいか82)



聖書 マルコ16・12～20
テーマ 宣教命令

序論

(鎌野)

マルコ16・9以下がカギ括弧で囲まれているのは、この部分が初期の写本に含まれていないからである。8節でマルコ福音書が終わるのはあまりにも唐突であることから、かなり早い時代にこの部分が追加されたのではないかと、多くの学者は推測している。確かにその内容は、他の福音書に記されている事柄を短くまとめたもののように思える。12節は、先週学んだことだとすぐわかるだろう。しかし、そのような背景があるとしても、この部分は世界宣教の意義を教える貴重なテキストであることは否定できない。3つの方面から、主がここで与えられた命令を調べてみよう。

一、不信仰な弟子への命令

マグダラのマリヤも、彼女の話を聞いたエマオの途上の弟子も、彼らの話を聞いた11弟子たちも（ルカ24・33～37）、主の復活をすぐには信じることができなかった。主イエスが「彼らの不信仰と、心のかたくななことをお責めになった」のも、当然である。しかし主は、そのような不信仰な弟子たちを見捨てられたのではない。不信仰だったからこそ、彼らが信じられるように「ご自身を現されたのである。これは、トマスの場合を考えると、すぐわかる（ヨハネ20・26～29）。だが、たとい主の姿を見なくても、信じるからこそ、主の求められていることであつた。

主は、不信仰だった弟子たちを、不信仰な人々に遣わされる。不信仰な人々の気持ちが理解できるからだ。自分が不信仰だったことを思うならば、忍耐をもつて、不信仰な人々に働きかけることができる。宣教は、信仰深い人しかできないと考えるのは、大きな間違いだと気付いてほしい。

二、全世界へ出て行けとの命令

主イエスは、その公生涯において、異邦人ではなく、「イスラエルの家の失われた羊」に福音を伝えるよう、弟子たちに命じておられた（マタイ10・6）。しかし十字架を前にして、神の国は異邦人にも与えられることを告げ（マタイ21・43）、また「御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられる」とも語られている（マタイ24・14）。たとい、ユダヤ人が最初に選ばれたにせよ、全世界のすべてのものを創造された神が、すべてのものを救おうとなされるのは、きわめて当然のことである。

だから復活の主は、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」と命じられたのだ。不信仰だった弟子たちも、この命令に従って出て行った。使徒行伝には、この経過が詳しく記されている。しかし、福音を宣べ伝えるときに、「信じてバプテスマを受ける者」と「不信仰の者」が出てくることは、避けがたい。神が自由意志を与えられたからである。現代においても、教会の外に出て行って、福音を宣べ伝えることを忘れてはならない。たとい、不信仰の者ばかりであっても、あきらめてはならない。

三、主と共に働かれるゆえの命令

いつの時代にも不信仰な者がいるからこそ、主は信じる者に様々な（しるし）を伴わせられる。彼らがそれを見て信じるためである。もちろん、見ないで信じるのが最も大切なのだが、主は御旨の中で、不信仰な人々のために、これらのしるしを示される。使徒行伝には、「毒を飲んでも、決して害を受けない」というしるし以外は、すべて記録されていることに心を留めたい。

ただ注意すべきなのは、人の力でこれらのしるしを行うのではないことだ。これらは、「主も彼らと共に働いておられることの証明なのである。それが一番良くわかるのが〈御言に伴うしるし〉と言える。聖書のみ言葉を語るとき、たとい不思議なしるしがなくても、信じる人が起こされる。私たちが今、主イエスが復活されたことを信じているのは、何か特別なしるしを見たからだろうか。中にはそういう人もいるだろうが、ほとんどの場合、聖書の言葉をそのまま受け入れたからではないか。同様に、不信仰な私たちが福音を宣べ伝えても、主と共に働いてくださるからこそ、人は救われるのである。福音が全世界に広がっていったのは、聖徒たちが出て行って宣べ伝えたからであるのはもちろんだが、「主も彼らと共に働いて」かれたという事実を決して忘れてはならない。

結論

私たちの宣教は、「神の宣教」である。だから不信仰な私たちでも、主は用いてくださる。これを信じて、出て行って福音を伝えよう。

研究資料

(石田)

この箇所は3つの部分から成っている。二人の旅人への顕現(12、13)、十一弟子への顕現(14、18、昇天と神の右に座られたこと(19、20)。使徒行伝を先取りする主の約束が力強く記されている。

テキスト

12 この後、そのうちのふたりが、いなかの方へ歩いていくと… この出来事はルカ24・13～31に詳しく記されている。エマオ途上に現れた見知らぬ人が、主イエスその人であることに二人の弟子たちは最初、気づかなかった。

13 彼らはその話を信じなかった 11節と同様、主の復活を一番に信じなければならぬはずの弟子たちが、最初は信じられなかったことが強調されている。

14 彼らの不信仰と、心のかたくなことをお責めになった これはルカ24・36～40、ヨハネ20・19、20に記されていることで、主の復活された日の夕方の出来事である。「十一弟子」と記されているが、これはユダが脱出した後の使徒たちの名称である。トマスを除く10人の弟子たちがそこに居合わせた。弟子たちの信じられない姿は一貫している。しかしマリヤと二人の弟子の知らせに対しては信じられないで済みますことができても、主ご自身が目の前に現れては信じないわけにはいかなかった。

15 全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ いわゆる「大宣教命令」で

あるが、マタイにおいてはすべての国民を弟子とすること、バプテスマを施すこと、主の言葉を守るように教えることとなっている(マタイ28・19、20)。ルカにおいては、罪の赦しを得させる悔い改めがもろもろの国民に宣べ伝えられるべきこととなっている(ルカ24・47)。マルコではこれらが簡潔にまとめられている。

16 信じてバプテスマを受ける者は救われる バプテスマは救われるための条件ではなく、救われたことを公に証しすることである。決して、バプテスマを受けなければ救われまいと言っているのではない。主はバプテスマを授けておられないし、パウロもほとんど授けなかった。しかし主ご自身が率先して受けられたので、信じた者はその模範に従って受けるべきである(マタイ3・15)。

しかし、不信仰の者は罪に定められる この不信仰は14節の弟子たちの不信仰とは意味が違う。イエスが救い主であることを受け入れないことである。弟子たちは、人が救われるか罪に定められるかという永遠にかかわる権威を授けられている(マタイ10・40、16・19)。

17 信じる者には、このようなしるしが伴う… この「しるし」は弟子たちの手による奇跡であるとともに、「御言に伴うしるし」(20)でもある。毒を飲んでも害を受けないこと以外は、みな使徒行伝に記されている。わたしの名で悪霊を追い出し使徒行伝16・18、19・12。新しい言葉を語り使徒行伝2・4、19・6。

18 へびをつかむであろう 使徒行伝28・3～6。パウロがへびに噛みつかれたとき、害を受

けなかったことで、わざと掴んで見せたわけではない。病人に手をおけば、いやされる 使徒行伝19・12、28・8、ヤコブ5・14、15。

19 主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にすわられた これは復活40日後の昇天の出来事で、ルカ24・50、51、使徒行伝1・9～12に記されている。弟子たちは主の昇天を目撃はしたが、雲に包まれてしまったので、神の右にすわられたことは目にしていない。これは「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ」(詩篇110・1)の成就であるという信仰に根ざしている。これはステパノも証している(使徒7・56)。

20 弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた これは「全世界に出て行って」という主の命令に呼応したことである。この節から使徒行伝が始まっているようなもので、この一節で使徒行伝をまとめていとも言える。主も彼らと共に働き 使徒行伝は、主が聖霊によって弟子たちと共に働かれた初代教会の歴史である。御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった 主が生きておられるという証拠は、み言葉によつて引き起こされるしるしによつて確かめられる。そのしるしとは、この文脈における奇跡であることもあるが、より日常的にはみ言葉を聞くとき、あるいはみ言葉を行うとき体験する魂の変化である。その意味で主は聖霊によつて今も力強く信じる者を通して働いていて下さる。

参考文献 『ウエスレアン聖書注解』、『新約聖書注解』(マクドナルド)、『実用聖書注解』など。

聖書	マルコ16・12～20
タイトル	宣教命令
暗唱聖句	全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。 マルコ16・15
目標	最高最大のグッド・ニュースを伝えよう。

導入

(松浦)

今の時代は、ラジオやテレビだけでなく、インターネットの時代です。各教会のホームページや様々な方法で聖書のメッセージに、いつでも触れることができます。でも、イエス様の福音は、人から人へ、イエス様を信じる熱い心を通してのみ伝わっていくと信じます。私たちも心に聖霊の熱い燃える心をいだいて歩みましょう。

信じなかった弟子たち

先週学んだ、エマオ村に向かう弟子たちは、イエス様がずっと一緒に旅を続けてくださったのに、復活が信じられませんでした。他の11弟子たちもマグダラのマリヤが朝早く墓で見たこと、聞いたこと、主に出会ったことを伝えたと、すぐには信じることはできませんでした。ある日、イエス様は弟子たちが集まって食卓についているところに現れ、彼らの不信仰と心のかたくなことをお責めになりました。「なぜ、マリヤのいうことを信じていないのか、クレオバとその仲間のいう言葉を信じていないのか」と。たまたま、その場にいなかったトマスは「そんなこと信じられないよ。ほかは自分の指を、その釘跡に差し入れ、また、自分の手でわき腹に手をいれて確かめて見なければ、信じ

られない」と一歩も譲りません。ある日、イエス様はトマスの前に現れ、「トマスよ。あなたの指をわたしの手の釘あとにつけてみなさい。見ないで信じる者は、幸いである」と語られました。

イエス様のご命令

「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」というイエス様のご命令を聞いた弟子たちは、自分たちのような不信仰な者をゆるし、忍耐をもって気づかせてくださったイエス様の愛に心燃やされました。「イエス様は生きておられる。信じてバプテスマを受けるものは救われ、永遠の命が与えられます」と、全世界に出て行って、福音を宣べ伝えたいのです。

私たちが共に働かれる主

弟子たちがどのように福音を宣べ伝えたいのか、うすは、使徒行伝にくわしく記録されています。イエス様の弟子たちは命がけでイエス様のご命令を実行しました。エルサレムで起った出来事は今や世界の果てにまで、野を越え、山を越え、21世紀の今日までも宣べ伝え続けられています。それは、なぜでしょうか。弟子たちががんばって、努力して、さまざまな工夫をこらして人々を教え導いたからでしょうか。いいえ、そうではありません。確かに、そういうことも大切な一面がありますが、何よりも大事なことは、復活の主ご自身も共に働いて、み言葉に伴うしるしをもって、福音の確かなことを示し続けていくからなのです。先生が救われて今みんなの前に立っているというこの事実は、だれかが先生にイエス様の福音を伝えてくださったからです。私たちも出て行って、お友だちや家族にイエス様のことを宣べ伝えましょう。

世界中で活躍される日本人の先生方

100名近い主の働き人が日本から海外に遣わされています。日本イエス・キリスト教団からも先生方が宣教師としてご奉仕して下さっています。宣教師の方々はそれぞれの任期を終えると日本に帰ってこられ宣教の報告をしてくださいます。私たちすべての人が宣教師となつて世界に飛び立つて行くことはできませんが、先生方の報告を聞いて祈る奉仕ができます。皆さんも宣教師のために祈る人になつてください。

今日はフィリッピンで活躍しておられる佐味湖幸先生のお証を紹介しましょう。OMFインターナショナルの働き人です。先生は、フィリッピンの貧しいストリートチルドレンと呼ばれる子どもたちのために奉仕されています。家もなく家族もばらばらで明日どうして食べ物を見つけようかという貧しい子どもたちのために奉仕し、福音を宣べ伝えておられます。先生にお会いした時、どうしてこのような働きに導かれたのですかと、質問しました。先生は幼いころから教会学校に通っていました。その教会学校では世界の地図を広げて祈る子ども祈禱会がありました。神様、どうぞ宣教師を起こしてくださいと、熱心に祈り続けました。やがて大阪音大を卒業された先生は音楽の先生になるべきかと祈っている時、宣教師となつて私の遣わす地に行きなさいとの神様の声を聞かれたのです。すべてを捨てて困難な地で奉仕される先生は素敵な笑顔で輝いておられました。

(ふくいん子どもさんびか26)



5月

7日 聖書講解

聖書 使徒1:1-11
テーマ 父の約束

序論

(金井)

今年度は「教会とともに」を年題としている。今日から17回テキストに用いる「使徒行伝」は教会の原点、教会の本質を知るために最も重要な文書である。現代のキリスト教会では多様な活動が展開されており、それは良いことであろう。しかし、ともすると、周辺の・付属的な活動に振り回されて教会独自の使命が見失われ、中心的な営みがおろそかになることも無いわけではない。その結果、教会そのものが沈滞し、消失することさえある。「使徒行伝」から、主が計画して建て上げておられる「教会」について共に学んでいきたい。

一、父の約束

本書執筆の歴史的事情は冒頭に明記されている。「使徒行伝」は「ルカによる福音書」の続編として、医者ルカが執筆した文書である。著作年代は紀元60年代前半と考えられる。ルカは〈第一巻〉において、イエスの降誕、少年期、宣教、十字架の死、復活、顕現、そして、昇天を記した。その第一巻を閉じるにあたって、彼は主イエスが語られた次のみ言葉を記した。「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」(ルカ24:49)。そして、ルカは第二巻の初めにこの〈約束〉を再度記し、説明を加えている。(エルサレムから離れないで、

かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう)。

この〈約束〉の成就、すなわちイエスの弟子たちが〈聖霊によって、バプテスマを授けられ、上から力を授けられる〉ことが、教会の誕生と世界宣教の必須条件だったのである。

この約束のものを受けるために弟子たちがなすべきことは〈都にとどまって、〈待っている〉ことであつた。この〈ガリラヤの人たち〉は〈エルサレム〉で復活のイエスにお会いしていないながら、都を離れて故郷に帰り、漁師に戻ってしまった(ヨハネ21章)。主を裏切った自分にはもう〈使徒〉(弟子)の資格は無いし、もう宣教をする自信も無いと、彼らは自己絶望に陥った。この人たちを主イエスが慰め、励まして再びエルサレムの都に送り返されたのである。

あなたは今どこにいるのか?自分の力に頼っていたずらに走り回っているのか?疲れ果てて自分に失望し、逃げて自分の殻にこもっているのか?イエスはこの弱く愚かな、情けない私たちを責めてはおられない。主はあえてこんな私たちを選び、私たちの手によって主の働きを継続するために、復活の姿を現し、慰めに満ちたみ声を聴かせてくださったのである。もう一度神の都に帰り、約束の御霊を求めて、祈り待ち望もうではないか!

二、聖霊によるバプテスマ

弟子たちはエルサレムで(一緒に集まった)ところ、彼らはなおも主イエスが〈イスラエル

のために国を復興なさる)ことを期待した。3年余り主イエスと共に生活して学び、復活の主から旧約聖書に記された神の計画を説き明かされたのに、彼らはまだ悟らない。(真理の御霊)(ヨハネ16:13)に導かれなければ、本物の宣教はできないし、本物の教会は建て上げられないのである。

弟子たちにはすでに、聖霊の力によって宣教をした経験があつた(ルカ9:1-6)。しかし、彼らはさらに「聖霊の中に浸される」(5節直訳)必要があつた。バプテスマのヨハネはヨルダン川で彼らを水に沈めた。その如く今や彼らは聖霊漬けにされて、聖霊の圧倒的支配力を受けるのである。

三、キリストの証人

イエスは弟子たちはこの聖霊の恵みを語られた。(ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう)。聖霊は弟子たちを力に満たして、(地のはてまで)イエス・キリストを証しする証人と変える。イエスは全天地、全人類の主であり、救い主である。聖霊の力によって(エルサレム、ユダヤ)という民族的枠組みは打ち破られ、全世界にキリストの教会が拡大していくのである。

結論

主イエスが再び天から降って来られる日は近い。今こそ私たちも聖霊に満たされて、聖霊の力によって(地のはてまで)キリストを宣べ伝えよう!

研究資料

(足立)

テキスト

3 主イエスの十字架の受難、復活、そして昇天に至る四十日間の出来事は、四つの福音書及びパウロの手紙に記されている(参照Ⅰコリント15・3―8)。特にルカは福音書24・13以下において主イエスの復活後について詳しく記録している。この四十日にわたる期間主イエスは **神の国**のことを語られた。神の国の宣教は、主イエスのガリラヤ伝道に始まるもので(マルコ1・14―15)、キリストの到来において既に成就し、かつ実現しつつある福音の現れである(ルカ10・9、11・20)。この神の国の出来事を決定的にした出来事が、主イエスが死人から復活した歴史的事実であった。使徒行伝における使徒たちの宣教内容も、主イエスの復活により神の国が原理として実現したと言うことである(8・12、19・8、20・25、28・23、31)。そして神の国の福音には、キリストの再臨と審判も含まれている。

4 4―5節においてルカは、聖霊の降臨とバプテスマを力説することにより、生けるキリストに強調点をおいている。そしてこのことは福音伝達の前進と本質的に結びついている。復活された主イエスは弟子たちに、エルサレムを離れないで聖霊の降臨を待ち望むよう命令された。**父の約束**とは、父なる神がなさった約束であり、主イエスによって既に語られたメッセージである(ルカ24・49)。十字架前夜においても主イエスは十分に語っておられた(ヨハネ14・16―21、26、15・26―27、16・7―15)。それはある意味で、主イエスを拒絶した場所(エルサレム)が新しく主イエ

スを証しし始めるところとなるためでもある。

5 主イエスの約束は、バプテスマのヨハネがした証言が想起されることによって、明確にされる(マルコ1・8、マタイ3・11、ルカ3・16)。そしていよいよ聖霊によるバプテスマに弟子たちひとり一人が与る時が近づいたと、主は語られた。聖霊に満たされることこそ、神の国の福音宣教に携わる弟子たちが最も必要としている神からの祝福であり力であった。

6 ルカは3節で神の国に言及しているが、ここではそれに関して弟子たちがどういう理解を持っていたかを記している。彼らの関心は、主イエスがいつイスラエルの国を再興するか否かに集約している。これはユダヤ民族の根底にある神への期待を示すものである。彼らにとつてはイスラエルが外敵(つまりローマ)から解放され、神の支配が政治的に実現し、他の民族がユダヤ人に追従することが昔からの願いであった。この点からして、弟子たちの福音理解はこの時点できえも十分だったと言えよう。

7 主イエスは、彼らの問いかけを直接否定する形ではお答えにならない。しかし神がその目的を完成なさるときは、父なる神だけがご存じであることを主張される(参照マタイ24・36、マルコ13・32)。

8 ここにキリストの証人がよって立つ、また使徒行伝全体を貫くテーマが明確に提示されている。これは主イエスご自身からの直接の委任である。事実これは昇天前に語られた主イエスの最後のことばである。それ故、主の弟子たちはキリストを証しする働きを成し遂げなければならない。ただし人間的な何かによってではなく、聖霊なる神の主権的な働きによってである。そこには罪人

の野心や野望は入り込めない。主イエスご自身の公生涯の始まりでさえ、聖霊なる神の清楚な美しさから出発している(マタイ3・16、マルコ1・10、ルカ3・22)。使徒行伝においてこの1・8は、全体の内容区分も示している。エルサレム(2・42―8・3)、ユダヤとサマリヤ(8・4―12・24)、ローマに至る地の果て(12・25―28・31)。

9 主イエスの昇天に関する記述は実に簡潔である。ここで大切な点は、弟子たちが主イエス昇天の目撃者であった事実にある。既に弟子たちは四十日という復活の主の顕現に与っていた。そして昇天に及んでも肉眼ではっきり見た。雲は疑いなく目に見える神の臨在と栄光を提示している(参照、出エジプト40・34、マルコ9・7)。

10 見つけている(アテニゾー)ということばは新約で14回出てくるが、そのうち12回をルカが用いている(ルカ4・20、22・56、使徒1・10、3・4、12、6・15、7・55、10・4、11・6、13・9、14・9、23・1)。主イエスの昇天に代わって、白い衣を着た人がふたり立っていた。これは天使のことである(参照ルカ24・4、使徒10・30)。

11 天使の役割は事実の説明を与えること。そのメッセージには要点が二つある。①弟子たちが見ていた主イエスは天にあげられた。②弟子たちが知っている主イエスは、天にあげられたときと同じありさまで再臨される。

参考図書 齋藤篤美『使徒の働き』『新聖書注解：新約2』(いのちのことば社)、F・F・ブルース『使徒行伝』聖書図書刊行会 Longenecker RN, "The Acts of the Apostles," The Expositor's Bible Commentary, Vol.9 (Zondervan) Marshall IH, Acts (IVP) .

5月

7日 礼拝メッセージ例

聖書 使徒行伝1:1-11
タイトル ダイナマイトの力
暗唱聖句 地のはてまで、わたしの証人となるであらう。 8節
目標 聖霊を受けて、はじめてイエス様の証人となることを知る。

導入

(小野)

とっても気持ちのいい五月になりました。世の中では「五月病」なんていう病気があるようです。新しく大学に入ったり、高校に入ったり、就職したりで、緊張して一ヶ月くらいたつと、ホームシックになったり、前のお友だちのことが懐かしくなったりして、ちょっと心が「しなっと」なる病気のようです。神様を信じていてもそうなる人もあるかもしれません。が、今日のイエス様からのメッセージは、心の底から力をいただけるものです。それは「ダイナマイトの力」。ダイナマイトっていうのは、大きな堅い岩の固まりもバキューンって碎いてしまうようなすごい力をもっています。ちょうどそのように、力を与えられて「しなっと」した心がピンとなり、内側からやる気がわいてくるようになるということです。その力は「ただ聖霊があなたがたにくだる時」なのです。よく注意して読んでください。「ただ、聖霊が」です！

誰が証人に？

イエス様の愛がわかり、その愛に感激したら、誰でも、みんなに伝えたい、教えてあげたい！と思うでしょう。お弟子さんたちもそうだったんだけれど、聖霊がくだる前は弱虫弟子ばかりだったのです。

ゲッセマネでイエス様が捕らえられた時、弟子たちはくもの子を散らすように逃げて行きました。リーダー格のペテロはと言えば、あれほど「獄までも、死にまでもご一緒します」と言いながら、イエス様が捕らえられてしまうと、「わたしはあの人を知らない！」と三度までもイエス様のことを否定していました。復活の主を見た人の話を聴いても、お墓が空っぽなのを見ても、ユダヤ人たちを恐れて戸を閉めてビクビクしていたのでした。ところがです。ペンテコステの日がやってきて、約束の聖霊が天からくだり、ひとりびとりの上に注がれ、とどまって、弟子たちが聖霊に満たされた時、不思議なことが起こったのです。弱虫弟子たちが、ダイナマイトのような、天からの力に満たされて、イエス様のことを大胆に語り出したのでした。何よりも誰よりも、あのイエス様を知らない三度も否んだペテロにも聖霊が注がれ、聖霊に満たされたペテロは、全く人格が変わったようになって、力強く大胆に、ダイナマイトの力を持つてユダヤ人たちの前で、イエス様のことを証しました。つまり力強い証人となったのでした。弱虫弟子が証人にされました。ただ聖霊がくだった時でした！絶対に、人間の権力とか能力とかで強くなったものではありません。

どうして証人に

み言葉にはどういう順番に書いてあるかな？「エルサレム」が最初です。その町は弟子たちが一番近いというか、その場にいる所です。しかも、弟子たちが大失敗をした町ではありませんか！今、私たちと言うならば、家の中だし、一番近い人々、私たちのことをよく知っている人、家族のことを示しています。そんな恥ずかしい！どこからそんな勇気が出てくるの！「ただ、聖霊があなた方にくだる時」ですよ。そこからさ

らには、ユダヤとサマリヤの全土、そして地のはてまでも…と証されています。

B・F・バックストン先生

皆さんはこの連休をどこでどんなふうに過ごされましたか？このゴールデンウィークの真っ最中に、塩屋にある関西聖書神学校において、第72回塩屋聖会がもたれました。もしかして、お友だちの何人かの方々は来られていたでしょう？これはイギリスの宣教師、B・F・バックストン先生とP・A・ウィルクス先生とによって、またその他多くの日本人のリーダーたちによって始められ、続けられてきた大切な聖会です。バックストン先生は、ケンブリッジ大学四年生の時、アメリカから伝道にきたムーディーの集会で、救われて新しく生まれ変わり、ウェブ・ペプロー先生のもとで信徒として奉仕していた23歳の時、自分の心が清くないことを示され、神様に祈り求めて、聖霊のバプテスマをいただきました。24歳の時ハドソン・テラーの海外宣教アピールで祈りはじめ、ついに30歳、180年11月24日に日本に到着されました。英国からは全く「地のはて」のような国日本へ！多くの犠牲を払って、日本を愛して力強い主の証人として来てくださったのです。「バックストン先生は聖霊について話ただけでなく、聖霊を見せた人と言われ、宣教師が大嫌いだっただ内村鑑三先生は、「バックストンは人類の華」とさえ言いました！そんな魅力ある「主の証人」に私たちもならせていただきたいですね！「ただ、聖霊によって！」

(日本ホーリネス教団ごもさんびか86)



聖書 イザヤ66・7～14
テーマ 母の愛(母の日)

序論

(金井)

ふるさとから便りと共に手編みの手袋が届いて、子が母の愛と労苦を思いやる歌がある。情緒の深い有名な歌である。母と子には他に類を見ない、強い心の絆がある。今日は、母親たる者にそれにふさわしい愛の心をお与えになった神の愛について学ぼう。

一、苦しみ無しに産ませるお方

イザヤ書は紀元前740年代から前680年代にかけて南王国ユダで活動したイザヤの預言を集めたものである。彼が生きた時代には、ユダの人々は「主を捨て、イスラエルの聖者をあなどり、これをうとんじ遠ざかった」。彼らは「罪深い国びと、不義を負う民、悪をなす者のすえ、墮落せる子ら」と呼ばれている(1・4)。ユダはその罪のために神にさばかれた。前587年に首都エルサレムはバビロニア軍によって徹底的に破壊され、人々はバビロンに捕囚とされたのである(39・6～7)。

しかし、バビロニアを打倒したペルシヤ王クロスは前538年にユダヤ人の帰還を許可する勅令を出した(45・13)。イザヤは民の帰還とエルサレムの再建を預言した(52・1～10)。「シオンは産みの苦しみをなす前に産み、その苦しみの来ない前に男子を産んだ」。彼らは軍事的政治的努力無しに解放されて、エルサレムを再建するのである。「わたしは産ませる者なのに胎をとぎすであらう

か」と主は言われる。今も主はシオンの民が急増するリバイバルを起こしてくださるのである。

二、豊かな母乳で養ってくださいるお方

イザヤ書は捕囚からの帰還を第二の出エジプトと見ている(43・14～21)。さらに、イエス・キリストによる異邦人の贖い、新しい神の民の創造は第三の出エジプトであり、終末におけるイスラエルの回復と新天新地の創造は第四の出エジプトと言える。本書の預言は重層的に理解すべきだろう。

第66章はこの壮大な預言書の締めくくりであり、イザヤ書の章数は旧約聖書の巻数と同じであり、内容的にも本書の末尾はこの世の終末、最後の審判、新天新地の創造となっている。

「すべてエルサレムを愛する者よ、

彼女と共に喜べ、彼女のゆえに楽しめ。

すべて彼女のために悲しむ者よ、

彼女と共に喜び楽しめ。

あなたがたは慰めを与える

エルサレムの乳ぶさから

乳を吸って飽くことができ、

またその豊かな栄えから

飲んで楽しむことができるからだ」。

これは「エルサレム」が全世界の民にとって祝福の源となることを預言している。エルサレムは、バビロンから帰還した民が前515年に神殿を再建したユダヤ教の中心地であり、紀元30年にイエス・キリストが十字架で贖罪を成され、聖霊が降臨されてキリスト教会が誕生した地であり、1948年に建国されたイスラエルの首都であり、そして、神

が創造される新天新地の都である(65・17～19)。私たちはエルサレムから流れ出た豊かな霊の乳によって養われている(1ペテロ2・2)。

三、母のように慰めてくださいるお方

イザヤ書のテーマは「慰め」である(40・1)。

「見よ、わたしは川のように彼女に繁栄を与え、みなぎる流れのように、

もろもろの国の富を与える。

あなたがたは乳を飲み、腰に負われ、

ひざの上であやされる。

母のその子を慰めるように、

わたしもあなたがたを慰める。

あなたがたはエルサレムで慰めを得る」。

イザヤ書の全体には神の聖性が貫かれている。聖なる神の裁きの場に立つとき、人は皆、イザヤの如く「わたしは滅びるばかりだ」と言わざるを得ない(6・5)。南王国ユダは神のさばきによって亡国の憂き目に遭った。すべて罪人の末路は消えることのない地獄の「火」である(66・24)。

しかし、神の御心は、人々が罪と死から救われて御国の民となり、神と共に永遠の幸福を生きることである(65・20～23)。そのために神は御子を我らの救い主として世に遣わされたのである。

御国の至福に至るまで、神の民は多くの試練を経る。だが、神の慰めも母親の如く豊かである。

結論

神の愛は豊かに溢れている。母性的な優しさもある。御子にあつて神に近付き、慰めを受けよう。

研究資料

(石田)

イザヤ書66章には、神が母親のようにご自分の民をいつくしみ、保護し、養い育てようとする御心が繰り返し記されている。ここでは神が人間の母親に備えた母性愛というものが、神の慈愛をとえるのに用いられている。母親は父親と共に子どもに対しては神の代理人という立場を与えられている。また子どもを教え、訓練する責任と権威も与えられている。そして子どもは親を敬い、従うことを通して神を畏れ敬うことを身につけるように計画されている。また、そのように養育されるべきであると聖書は言っている(箴言1・7、8、13・24、19・18、22・6、15、17など)。親から神を恐れることを教えられ、日常生活でみ言葉に従うことを訓練された子どもは、おおむね賢い判断と決断をし、仲間の圧力に耐え、多くの若者が陥る罪深い誘惑から守られやすい。したがって「あなたの神、主が命じられたように、あなたの父と母とを敬え。あなたがたの神、主が賜わる地で、あなたが長く命を保ち、さいわいを得ることのできるためである」(申命記5・16)とあるように、概して長生きするばかりか、永遠の命にあずかりやすいと言える。だから親を敬い従うように教え、訓練することは、子どもを救いに導く前提として欠かせない。

テキスト

12 見よ、わたしは川のように彼女に繁栄を与え
イスラエルの繁栄は、ひとえに神との正しい関係

に基づいていた。神の戒めに聞き従えば、川の流
れが尽きないように平安(繁栄とも訳せる)が流
れるとたとえられている(48・18)。**みなぎる
流れのように、もろもろの国の富を与える**。次か
ら次へと途切れることなく富が押し寄せるとい
う約束である。ここで言う繁栄や富は、単に物質的
なものだけでなく、神から義とされること、それ
による魂の平安など、さまざまな霊的祝福を意味
している。**あなたがたは乳を飲み、腰に負われ、
ひざの上であやされる**。母親がわが子を養い育て
る様であるが、これは神とイスラエルの関係、さ
らに主イエスを信じる者との関係をたとえてい
る。神と神の言葉に従う者は、神から母親のよう
な保護を受けるという約束である。イザヤ書には
同じ主旨で神の慈愛が記されている。「女がその
乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまない
ようなことがあるか。たとい彼らが忘れるよう
なことがあるても、わたしは、あなたが忘れるこ
とはない。見よ、わたしは、たなごころにあなた
を彫り刻んだ」(49・15、16)。母親の愛は、備え
られた母性愛だけでなく、自分を注ぎ出し、犠牲
にしながら育てる中で鍛えられ、成熟していくも
のでもある。人間の愛の中で最も神の愛に近いと
言われるが、実際、母親の愛は神の愛を連想させ
るところがある。

13 **母のその子を慰めるように、わたしもあなたが
たを慰める**。神がイスラエルを慰めるというの
は、直接的にはイスラエルの民をバビロン捕囚か
ら帰還させることによって、捕囚の恥をすすぎ、
その原因である背神の罪を贖うことについての預

言である。ここでは母がわが子を慰めるように、
神がイスラエルの悲しみを喜びに変えたと約束さ
れている。これは究極的にメシヤの来臨と、メシ
ヤを信じる者が救われる時代のことを指し示して
いる。シメオンは、イスラエルの慰められるのを
待ち望んでいた、とある(ルカ2・25)。慰めと
は救いのことでもある。**あなたがたはエルサレム
で慰めを得る**。バビロンから帰還した民が、エル
サレムの町と神殿を復興することによって、捕囚
の苦しみが喜びに変えられるという預言である。
9節の「わたしが出産に臨ませて産ませないこと
があるか」は、神がイスラエルを忠実な民とし
て新しく生まれ変わらせることを言っている。さ
らに新しいエルサレムである教会が、ペンテコス
テの日に誕生することを含んでいる。11節の「あ
なたがたは慰めを与えるエルサレムの乳ぶさから
乳を吸って飽くことができる」は、民がエルサレ
ムにおいて慰められることで、究極的にはイエス
の十字架によって救いの道を得ることを暗示して
いる。

14 **あなたがたは見て、心喜び、あなたがたの骨
は若草のように栄える**。イスラエルの民がバビロ
ン捕囚から帰還し、エルサレムと神殿の再建を見
て骨の髄から歓喜すること。主の手はそのしもべ
らと共にあり、その憤りはその敵にむかっている
ことを知る。主の御手がエルサレムを保護し、外
敵から守る様である。見えない神の御手を信仰の目
をもって見るにより平安を得ることができる。
参考文献 『新聖書注解』、『実用聖書注解』、キリ
スト者学生会『聖書注解』など。

5月

14日 研究資料

聖書 イザヤ66・7～14
タイトル ゆたかな慰め
暗唱聖句 母のその子を慰めるように、わたしもあなたがたを慰める。 13節
目標 母に感謝し、母のように慰めてくださる神を仰ぐ。

導入

(小野)

今日は「母の日」！ととってもうれしく、感謝が心いっぱいになる日ですね。今から101年前1906年にこの「母の日」のきっかけとなるできごとがありました。アメリカのヴァージニア州ウェブスターという所にあるメソジスト教会でジャービス婦人の追悼記念会が行われました。この婦人は26年間子どもたちに教会学校で聖書を教えていました。ある日こう言いました。「あなたの父と母を敬えと聖書にあります、皆さんの中でなたでも、どのようにお母さんに感謝をあらわしたいか考えてみてください」と。それを聞いていた娘のアンナさんは、お母さんの追悼記念会の折、「私の母はこの聖書から26年もの間教えてくれました。敬意をこめて、記念のしるしに」と言って列席者に白色のカーネーションを手渡したのです。やがてこの美しい記念が全世界に母を敬う「母の日」として広がっていきましました。クリスチャンの母と娘から始まったことは私たちにとても大きな喜びと誇りですね！お母さんは何て素晴らしい存在でしょう。心から「お母さんありがとう」と言い、感謝の心をあらわしましょう。さて、お母さんが私たちを慰めてくれるように、時にはそれ以上に私たちを慰めてくださる神様について考え、大いに慰められましょう。

母の胸・み言葉によるゆたかな養い

お母さんのオッパイの味、まだ覚えていませんか？母乳と言いますね。お母さんに飲ませてもらうお乳は、何て不思議ですばらしいものか、知っていますか？赤ちゃんにとっては命の養いそのもので、すべてのすべてとも言えます。しかもその中には赤ちゃんの成長のために必要なものがぜーんぶ含まれているし、赤ちゃんが大きくなるにつれて栄養も味も濃くなっていく！それにちょうどいいくらいに暖かいのですから、すごいですね。お母さんの胸は赤ちゃんや子どもたちにとっては別世界、やさしく抱かれ、からだも育てられ、心も安らかにぐんぐん成長していくところなのです。ちょうどそのように神様も私たちにしてくださるのです。神様は、「わたしは全能の神である」(創世記17・1)とご自分を紹介しておられます。これは、「わたしは乳房の神、お母さんの胸の神」という意味で、「エル・シヤダイ」と言うのです。神様は、生けるみ言葉、命のみ言葉をもって、私たちの霊と心をしっかりと養ってください。

母のひざ・祈りによるゆたかな交わり

お母さんのひざ、覚えてますか？今だってよくおひざにすわってますよというお友だちもたくさんいるでしょう？お母さんのひざの上は気持ちがいいよね。安心できるよね。そして、そのひざの上で、お母さんに何でもお話ししたり、甘えたりできるのでうれしいですよ。小さい子はひざの上であやしてもらって、キャッキャッ、キャッキャッとても楽しそうです。少し大きくなってくると、お母さんのひざの上で、何かおねだりをするようになるでしょう。ちょうどそのように、私たちは神様の前にひざまづいて、「お祈り」に

よって、何でもおねだりして求めることができるのです。お祈りはまた、神様とのお話でもあります。皆さんは毎日、子ども聖書日課で、み言葉を読み、そしてお祈りをしていてと思います。あのお祈りだけでなく、神様には何でもおねだりしたり、お話ししたり、お願いしたりしていいのです。神様は、「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える」。(エレミヤ33・3)と約束してくださいます。

慰められた母モニカ

アウグスチヌスは34年11月13日、北アフリカに生れました。お母さんのモニカは神様を信じる人でした。アウグスチヌスは「母の乳と共にキリストの名を吸い込んだ」とさえ言われたくらいだったので、異教徒の父は息子进行カルタゴに行かせ、言葉の表現を効果的にする方法を学ぶ修辞学を学ばせました。しかし、それからどんどん堕落して、18才になろうとする時には正式な結婚を認められていないのに、子どもを産ませてしまうほどでした。母モニカの悲しみはとても深いものでした。「私の息子は滅びる！祈りしかできません」と涙を流すモニカに「一番いいことをしているのです。涙の子は滅びません」とアンブロシウス司祭は慰め励まします。ついにアウグスチヌス32才、モニカ55才の年、386年みごとに回心し、次の年に洗礼を受け、聖アウグスチヌスとされました。モニカの涙のおねだりの祈りを慰めの神様が聞いてくださったのでした。一番の慰め手はやっぱり神様です！
♪いつくしみ深き♪ (新聖歌200)



聖書 使徒1・12～14 テーマ 祈る群れ

序論

(金井)

今や日進月歩の時代は終わり、秒進分歩の時代となった。経済社会では激しい競争が展開されており、企業人は深夜まで忙しく働いている。サバイバル個人主義は若者や子どもにも浸透している。この時流に呑み込まれて教会でも、いつも何かをしていないと居づらいような、孤独を感じるような雰囲気が生じていないだろうか。生産的な活動に惹かれて、祈りがおろそかになっ
てはいないだろうか。祈りの交わりについて再考したい。

一、オリブ山を下って

主イエスは復活された後、40日間たびたび弟子たちにお姿を現された。その間、主が彼らと共に食事をされたという記録が多くある(ルカ24・30、41～43、ヨハネ21・9～12、使徒1・4、10・41)。初代教会の営みの中心は主イエスとの食事を記念する聖餐と愛餐の交わりにあったのである(2・42、46、6・1～2、エペソ2・17～34)。その40日間の後、イエスは「オリブ」山から天に昇られた。そこは「安息日に許されている距離」すなわち約1キロメートル以内の地点であった。「イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった」(9)。雲は神の臨在と栄光を象徴している(出エジプト40・34～38)。主イエスは父なる神の右、栄光の

座に着かれたのである(2・33)。

イエスは手を上げて弟子たちを祝福しながら天に昇られた。イエスが昇天されたのは、大祭司として人々のためにとりなしの祈りをするためであり(ヘブル8・1～2)、「父から約束の聖霊を受けて」、弟子たちに注ぐためである(使徒2・33)。

雲に包まれていく主イエスのお姿を弟子たちは茫然と見つめていた。すると、「白い衣を着たふたりの人」が彼らに言った(ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであらう)。二人は天使だろう。

弟子たちの心は在天のイエスから離れることはない。だが、彼らは山を下りて都に帰らなければならぬ。《使徒》とは主から使命を託されて世に遣わされる者である。オリブ山はイエスの祈りの山である。弟子たちはここから遣わされて、人々が暮らす都の中に祈りの家を築くのである。

二、屋上の間に集まって

《彼らは、市内に行つて、その泊まっていた屋上の間にあがつた》。当時の家には窓が少なく、屋内は昼間でも暗かった。そのため人々は屋上で多くの時を過ごした。そこに天幕を張ったり、屋根を作ったりして、屋上の間を設けたのである。原文では「屋上の間」に冠詞が付いている。ここはエルサレム教会がよく使った場所だろう。

そこに集まったのは、12使徒(イスカリオテのユダを除く)と、ガリラヤからイエスに従ってきた《婦人たち》、「イエスの母マリヤ、およびイエ

スの兄弟たち」であった。イエスの身内の者たちは、かつては彼の宣教に反対したが(マルコ3・21、ヨハネ7・5)、イエスの十字架と復活を経て、彼らもイエスの弟子団に加わったのである。

三、共に心を合わせて祈り続けた

そこに集まった《百二十名ばかりの人々》は10日間《共に、心を合わせて、ひたすら祈をしていた》。ルカは、イエスが洗礼を受けられた時、彼が《祈っておられると》、聖霊が彼の上に下られたと記す(ルカ3・21～22)。このイエスを模範として、イエスの弟子たる男女は祈り待ち望んで聖霊の満たしを受けなければならない。

ルカは、イエスの宣教におけるリトリート(退修・療養)と祈りの重要性について強調して記している(ルカ4・42、5・16、6・12、9・10、18、28～29、10・21～24、11・1～13、12・31～32、18・1～8、22・17～20、32、39～46)。私たちは多忙であればなおのこと、御前に静まり、主に再び(5)取り扱われる(beat)必要がある。共に祈ることが教会の原点であり、原動力である。

結論

私たちの群れは初めから百年以上、聖云や修養会を大切に守ってきた。塩屋の山で、磐梯山で、その他全国各地で聖会や修養会が開催されている。また、各地域教会は祈禱会を大切に守ってきた。この霊の交わりこそ私たちの群れの生命線である。共に集まり、共に祈り、聖霊に満たされて遣わされ、主の祈りの家である教会を建て上げよう！

研究資料

(足立)

主イエスの昇天とペンテコステとの間にあるこの時期は、弟子たちにとって待ち望みの期間であつたが、信仰による行動が欠如していたわけではない。主として弟子たちは祈りの日々を送っていた。先ず彼らは、主の約束(1・4)を受けて、聖霊に満たされ、力あるキリストの証人となるために備えていた(1・8)。またこの期間はイスカリオテのユダの欠員を補充する時でもあつた。

12―14節は独立した単元と受け取られるが、実際この箇所は既にルカ24章で綿密に記された情報の要約、また拡張の部分である。弟子たちがエルサレムに戻ったことには、彼らが滞在していた屋上の間に帰ったことが含まれている。

テキスト

12 弟子たちはオリブという山からエルサレムに引き返し、そこで父なる神の約束を待った(1・4～5)。**安息日に許されている距離**とは、敬虔なユダヤ人が安息日に旅をするのに許されていた範囲のことである。それは200キュビト、約110メートルで出エジプト記16・29を民数記35・5に照らして解釈し、巧みにはじき出されたものであつた。ルカの意図は、主イエスの昇天がエルサレム近くで起こったことを示すためにある。

13 弟子たちは宿営していた**屋上の間**に戻つた。私たちはこの部屋を最後の晩餐が行われた場所と見なしたい誘惑に駆られるが、それは確かではない。ルカは2つの部屋に関して違ったことばを使っている(「座敷」(カタリユマ)ルカ22・11、屋

上の間」(ヒュペローン)使徒1・13)。弟子たちのリストに関しては、ルカ6・13―16と同じメンバーである(順序に違いがあり、イスカリオテのユダが削除されている点は別として)。

14 11使徒に加えて**婦人たち、特にイエスの母マリヤ**とある。この交わりの中に女性の存在が認められることは、既にキリスト教会の性質を暗示していると言える。ルカは教会における女性の役割に十分注目している(参照5・14、8・3、12、9・2、12・12、16・13、17・4、12、22・4)。**イエスの兄弟たち**は、主イエスの初期伝道において彼を信じていなかった(参照マルコ3・21、31―34、ヨハネ7・5)。しかし今彼らは、信仰者の仲間に加えられている。**心を合せて**(ホモスユマドン)という語はルカが好んで使った語で、使徒行伝に10回出てくる(1・14、2・46、4・24、5・12、7・57、8・6、12・20、15・25、18・12、19・29)。**ひたすら…していた**と訳される動詞(プロスカルテレオー)は、あらゆる行動において忙しい、或いは首尾一貫していることを意味する。ルカはこのことばを用いて新しい回心者たちが、ひたすら使徒たちの教えを学んでいたことを記している(2・42)。また使徒たちが「もっぱら祈と御言のご用に当ることにしよう」と自覚した場面でもこの語を使用している(6・4)。ここでルカは、パウロが言うように(ローマ12・12、コロサイ4・2)、たゆまない祈りにこの語を用いている。ここで彼らは疑いなく、祈りにおいて一致し、何事にも動じないスピリットで主イエスの約束(1・4、5、8)を待ち望んでいた。

ルカにとって神との交わりとしての祈りは、キリストの弟子性としての現れを意味している。使徒2・42の要約的な記述においても共同体として祈りがなされる言及がある(参照4・31、12・12)。ペテロとヨハネがペンテコステの後でさえ、午後三時の祈りの時に宮に上ろうとしたのは興味深い(3・1)。また信仰の敬虔さを現す二つの特徴として祈りと施しが記されているのも、キリスト信者の生活にチャレンジを与えてくれる(10・2―4)。

最初の共同体は生命あるものとして、祈りの文脈で重要事項が取り扱われている。初代のキリスト者がイスカリオテ・ユダの使徒職を継承する者をくじで選ぶ場合にも、主に祈り、導きを求めている(1・24)。彼らはヘロデ・アグリッパの手からペテロが救い出されるため熱心に祈つた(12・5)。七人の奉仕者の任職に際しても使徒たちは祈つて手を置いた(6・6)。バルナバとサウロが宣教のために聖別され、派遣される場合も同様であつた(13・3)。教会毎に長老が任命されるときも、祈りが中心にあつた(14・23)。アナニヤは祈っているサウロのもとに遣わされた(9・11、参照22・17)。パウロはミレトでエペソ教会の長老たちに説教し、その後共に跪いて祈つてから出発した(20・36、参照21・5)。

参考文献

小野静雄『使徒の働き』『実用聖書注解』(いのちのつばし社)・Fitzmyer,J.A.,The Gospel According To Luke (Doubleday)・Polhill,J.B.,Acts (Broadman)・Witherington,B.,The Acts of The Apostles (Eerdmans)・

5月

21日 礼拝メッセージ例

聖書 使徒行伝1・12〜14
タイトル まず、お祈り！
暗唱聖句 心を合わせて、ひたすら祈をしていた。
目 標 聖霊を受けるため、心を合わせて祈ろう。

導入

(小野)

春に新しい学年が始まって1ヶ月ちよつとたちました。中には、大の仲良しのお友だちが転校していったりして、さびしい思いをした人があるでしょう。もしかしたら、あなたが家族といっしょに新しい所に移ってきて、全然知らなかったお友だちと今まで過ごしてきたのかもしれない。そんないろいろな変化がある時、「エーッ！これからどうなるのかなあ、心配だなあ、大丈夫かなあ…」と思うでしょう。実は、この時のお弟子さんたちもきつとそんな思いだったのではないかな？と考えます。イエス様がせっかくよみがえられて、ワア、ウレシイ！と喜んでいたのに、1ヶ月ちよつとしたら、「わたしは行く」といって、もうすぐまたおられなくなるというのですから。「エーッ！そんな私たちどうしたらいいのかなあ」という不安な気持ちがいっぱいだつたのではないのでしょうか。

約束による励まし

そんな弟子たちにイエス様はすばらしい約束、父の約束を話してくれていましたね。「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間も

なく聖霊によって、バプテスマを授けられるであらう」(使徒1・4〜5)と。そしてあの最後の食事をした二階座敷でも、イエス様は「約束の聖霊」のお話をしっかりと話してくださいました。弟子たちには、それほどハッキリとは分からなかったのですが、心の中によみがえってきていたでしょう。「父の約束」を信じて、「聖霊のバプテスマ」を求めていけばいいのだなつて。

ある日、イエス様を中心に弟子たちをはじめ、約500人の人々がオリブ山に集まっていた時のことです。イエス様が復活されて40日目のことでしたが、弟子たちは「主よ、イスラエルの国の復興は今がチャンスですか」と尋ねたところ、「それは父なる神様が定められることだよ、あなたがたはただ聖霊を求めなさい。そして、エルサレムからはじまって、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となりなさい」と話されました。そして、ついに恐れていたことが起こりました。「あーっ、イエス様がー」と、見ているうちに、イエス様はどんどん天に上げられていきます。そうするうちに雲に迎えられて、とうとうお姿が見えなくなつてしまいました。弟子たちが何とも言えない淋しい思いで天を見つめていると、ふたりの白い衣を着た人が彼らのそばに立つて言いまして、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエス様は、天に上つて行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであらう」と。これはまたまた二つ目のすばらしい約束まで与えられましたよ。

祈りによる待ち望み

神様、分かりました。どうすべきかよく分かりま

した、と心に決心できた人々は、そのオリブ山を下つてエルサレムに帰りました。市内に入つて、泊まっていた屋上の間(アパ・ルーム)に上がつて行つたのです。何をするために？祈るためにです。ところがそこには120名ばかりの人々が一団となつて集まっていたとあります(15節)。オリブ山でイエス様が天に帰られるのを見たのは、500名ばかりの人々だったというのですから、数が全然あいません。他の380人くらいの人々は一体どうしたのでしょね？ある人々は、もしかしたら、復活のイエス様を見た喜びと勢いで、すぐにも飛び出して行つて福音を伝えたいけれど、失敗したり、失望したりしたかもしれない。他の人々は、あーあ、イエス様はもう行つてしまわれたよ、待ち望めつて言われるけど、そんな気の長いことはいやだね、と言って、イエス様のことも父の約束のことも忘れてしまったのかもしれない。しかし120名ばかりの人々、そこには11弟子はもちろんのこと、イエス様のお母さんのマリヤや婦人たちや、かつてイエス様の行動に批判的だったイエス様の兄弟たちもいました。みんなは心を合わせて、ひたすら、一生懸命に、ただお祈りをしていたのです。お祈りは不思議で、すばらしく、力があります。お祈りはお祈りする人を変え、聖霊に満たされる秘訣です。そして、神様の約束がその通りになるということが、お祈りによつてなされるのです。ですから、大きなことのためにも、どうしようか！と思う時にも、小さなことのためにも、まず、お祈り！です。あなたもひとり、ふたりで、みんなでお祈りしてください。

♪祈つてごらんよわかるから♪ (新聖歌481)



聖書 ヨエル2・26～32
テーマ ヨエルの預言

序論

(金井)

先週は、イエスの弟子たちが聖霊の降臨を10日間、祈りながら待ち続けたことを学んだ。聖霊降臨は〈終りの時〉の始まりである(使徒2・17)。ペンテコステの日に、聖霊は圧倒的な力をもってイエスの弟子たちに降り、教会を生み出された。それは、この世の終末に向けて、グローバルな宣教を展開するためである。この聖霊降臨の意義について預言した旧約聖書のテキストを学ぼう。

一、主の大きな恐るべき日

ヨエル書は〈ペトエルの子ヨエルに臨んだ主の言葉〉を書き記している、この名で呼ばれている(1・1)。「ヨエル」とは「主(ヤハウェ)は神である」という意味である。本書の著作年代については諸説ある。内的証拠から考察すると、本書では、長老と祭司がいて、神殿の祭儀が行われているものの、王についての言及が全く無い。北王国についての言及も無い。よって、ヨエルが預言者として活動したのは、帰還民が第2神殿を完成させた紀元前5年より後の時代であろう。

その頃、〈いなご〉の大群がユダに襲撃した(1・4)。それは他国の〈軍隊〉のようにユダの地を激しく攻撃し、荒廃させた(1・6～12、17～20、24～9)。この災害は〈主の日〉に近いことの警告であると、ヨエルは人々に告げた(1・15～16、2・10～11)。その日は、恐るべきさば

きの日である。ヨエルは人々に悔い改めを迫った(1・8～14、2・1、12～17)。

二、悔い改める者への祝福

ヨエルの呼びかけに人々は応えた。祭司たちは悔い改めて断食し、荒布をまとって嘆き悲しんだ。長老たちや会衆は集められ、皆、祭司たちにならって悔い改め、主に向かって叫んだ。

〈その時主は自分の地のために、ねたみを起し、その民をあわれまれた。主は答えて、その民に言われた、「見よ、わたしは穀物と新しい酒と油とをあなたがたに送る。あなたがたはこれを食べ、飽きるであろう」(2・18～19)。主はユダの民に豊かな回復の恵みをお与えになったのである(2・21～26)。

しかし、これで、将来における〈主の大きな恐るべき日〉が取り除かれたわけではない(2・31)。その日は必ず来る。その時、主は〈万国の民をさばかれ、彼らの犯した罪に対して報復されるのである(3・1～8、11～16、19、21)。

ユダの人々が経験した災いと回復は、将来、全世界の民に起こる出来事の予型である。すなわち、主が預言者を通して語られる警告の声に耳を傾けて、真実に悔い改める者にはすべて、回復の恵みが与えられる。キリスト者は主のさばきの日にも救われて、大いなる祝福にあずかるのである。

それゆえ、〈ペトエルの子ヨエルに臨んだ主の言葉〉は、〈これを聞け〉、〈耳を傾けよ〉、〈これを後の代に語り伝えよ〉という警告の言葉だったのである(1・1～3)。

三、御霊による預言

主は全世界の民に向かってこの警告と救いの使信を伝えるために、特定の預言者だけではなく、より多くの者に真理の御霊を注ぐこととされた。

〈その後わたしはわが霊を

すべての肉なる者に注ぐ。

あなたがたのむすこ、娘は預言をし、

あなたがたの老人たちは夢を見、

あなたがたの若者たちは幻を見る。

その日わたしはまた

わが霊をしもべ、はしために注ぐ。〉

この預言は、あのペンテコステの日に成就した(使徒2・17～18)。その時〈無学な、ただの人たち(同4・13)であるイエスの弟子たちが、〈聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した〉のである(同2・4)。それを見た人々は彼らを酔える人たちとあざ笑ったが、そうではなく、これはヨエルの預言の成就だったのである(同2・13～16)。

結論

私たちキリスト者の内には真理の御霊が宿っておられる(ヨハネ14・17)。御霊が私たちに語るべき言葉を教えてくださるのである(ルカ12・12)。「主の日」は近づいている。その大いなるさばきの日に、〈すべて主の名を呼ぶ者は救われる〉。しかし、遣わされる人がいなければ、宣べ伝える人がいなければ、主の御名を聞くことができず、信じることができないまま滅びる人がいるのだ。御霊の言える如くせよ！心を固くするなかれ！

研究資料

(石田)

ヨエルが預言者として活動した時代は、ユダのヨシヤ王の治世で前9世紀頃と推定されている。本書の冒頭から2・27までの箇所には、ヨエルの時代にすでに起こり、さらに近い将来に重ねて起こるいなかの大災害について記されている。それによってヨエルは、同時代の人々の霊の目が開かれ、悔い改めて神に立ち返るようにと迫った。ユダの民は、実際にいなかの害があまりにも過酷で容赦のないものであることを身にしみていたので、ヨエルの預言をまじめに受け取れば震え上がったはずである。幸い、彼らは悔い改めたので、審判は回避された。一方、それ以降の箇所(2・28～3・21)は、「主の大きいなる恐るべき日」つまり終わりの日・終末について預言している部分である。このとき神に敵対する人々の上に起こる災害は、いなかの害をはるかにしのぐさまが描写されている(2・30、31)。しかしその日は、さばきだけではなく、神に立ち返った人々にとっては祝福と回復の日となる。2・28の神がすべての人にご自身の霊を注ぐという預言について、ペテロはそれがペンテコステの日に成就したと説教し(使徒2・14～21)、聖霊降臨とそれによる教会の誕生についての預言であると宣言した。ヨエルは、聖霊の注ぎとメシヤの来臨とを結びつけた最初の預言者であった。

テキスト

25 …かみ食らういなかの食った年をわたしはあなたに償う いなかの軍勢によって食い尽く

された分量を償って余りある収穫を与えるという物質的な約束である。

26 あなたがたは、じゅうぶん食べて飽き、あなたがたに不思議なわざをなされたあなたがたの神、主のみ名をほめたたえる 神はいなかの害という裁きを下されたが、それを償われたことに對して民が賛美するに至るといふ預言である。物質的だけでなく、霊的に回復される。

28 その後 霊的な回復に増し加えられることが起こることになる。ペテロはペンテコステの日の説教で、「終わりの時には」と70人訳聖書から自由読み替えて引用している(使徒2・17)。その時とは、キリストの初臨と再臨の間の時代を指す。わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ

旧約時代、神の霊はさばきづかさや預言者、王、祭司など特別な働きのために選ばれた人だけに注がれた。しかも一時的な現象である場合があった。しかしやがてすべての人に注がれることになるという。これはヨエルの時代にも、旧約時代を通して類を見ないことであった。このことの成就として、ペンテコステの日、文字どおり「すべての人」ではなかったが、主にある人々の上に聖霊が降った。そのときペテロは聖霊によって、これがまさに預言者ヨエルの預言の成就であると語ることができた。ではなぜ神の霊を注ぐと約束されているのだろうか。罪を悔い改めたら赦されるといふところにとどまるならば、同じ罪を繰り返すことになる。しかし罪の力に打ち勝ち、キリストの形に似せられ、御心の内を歩むためには神の霊に全く支配されることが必要である。そのように人がき

よめられ、造り変えられるために神の霊の注ぎが約束されていたのであろう。 あなたがたのむすこ、娘は預言をし まさかと思ふような身近な者

普通の人たちも預言をする、つまり力強く神の言葉を語るようになる。あなたがたの老人たちは夢を見 先が見えていて、もはや夢を思い描くこともやめてしまった高齢者にも、神からのビジョンが与えられて霊に燃えるようになる。年齢に区別なく聖霊は注がれる。

29 その日わたしはまた わが霊をしもべ、はしために注ぐ 区別なく聖霊は注がれる。主を信じるすべての人に聖霊が注がれるという約束。

30 すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう 終末の戦争による破壊でかつてなく地上が荒廃するという預言。

31 主の大きいなる恐るべき日 主の再臨によって全世界の裁かれる日のこと。日は暗く、月は血に変わる 戦争という人災だけでなく、天体に異常な変化が現れる。それは主の再臨のしるしであると言われている(マタイ24・30、31、マルコ13・24～26、黙示録6・12～14、8・12)。

32 すべての主の名を呼ぶ者は救われる ローマ10・13に引用されているように、文脈から独立してよく用いられている言葉である。それと共に、マルコ13・27には天体の異常に続いて主の再臨があったときに「四方から選民を呼び集めるであろう」と言われている聖徒の携挙と関係があるかもしれない。

参考文献 『新聖書注解』、『実用聖書注解』、キリスト者学生会『聖書注解』など。

5月

28日

研究資料

聖書 ヨエル2・26～32
 タイトル 目を見張る預言
 暗唱聖句 その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。
 目 標 聖霊降臨は、旧約聖書の中に、預
 言されていたことを知る。

導入

(小野)

「えーっ、ウッソー、ホントー!?」なんて言うのはずいぶん昔にはやったのかもしれないが、実は聖書の中には、そんな、目を見張るような預言がいっぱい、いっぱい詰まっているのです。だから聖書を読むのはワクワク、ゾクゾクするような楽しいことなのです。

イザヤをはじめとして、エレミヤやエゼキエルやダニエルや、あと小預言者といわれる預言者たち12人の預言者が聖書に記されていますが、皆さんはその人たちの名前、全部言えますか? ややこしくて覚えにくいけど、覚えていきましょう。こういう預言者たちというのは、何とすごい人たちなのでしょうね。もちろん、神様が油を注がれて、預言すべき言葉を与えてくださるからなのですが、それにしてもやっぱりすごいです。今日学ぶのはヨエルと言われる預言者です。たったの三章だけなのですが、とても重要な預言を神様からゆだねられました。預言のすごいところは「その通りに必ずなる!」というところですよ。当り前なのですが、だからそのことがどんなに目を見張るような、信じられないようなことでも、きつとその通りになる、正真正銘、神様からのものということなのです。世の中では、言うだけは言うけど、全然その通りにならない

ことであふれているではありませんか。

どんな預言?

「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ」という預言です。「すべての肉なる者に」ですって!? ヨエルの時代の人々には、とうてい受け入れられないような内容でした。それまで、さばきつかさとか王様とか、預言者とか祭司たちには、神様の特別の油注ぎはなかったのです。ですから、そんなことになったら、一体どうなるのと不安にさえなったかもしれません。「すべての肉なる者」なのだから、たよりないと思える息子にも、騒がしくうるさい娘にも! 大丈夫かと思えるような老人たちにも、何を考えているのかわからないとみえるような若者たちにも、もちろん、幼い子どもたちにも、人に仕える仕事をしている僕や、はした女にも注ぐとのお約束なのです。

何が起こる?

息子や娘は預言をするようになる。つまり、神様の言葉を伝えるようになり、老人たちは夢を見、若者たちは幻を見るといいます。この約束の日には、ペンテコステ(聖霊降臨日)に「その通りになりました」。来週はそのペンテコステ記念礼拝の日曜日です。楽しみに教会に集まりましょう。

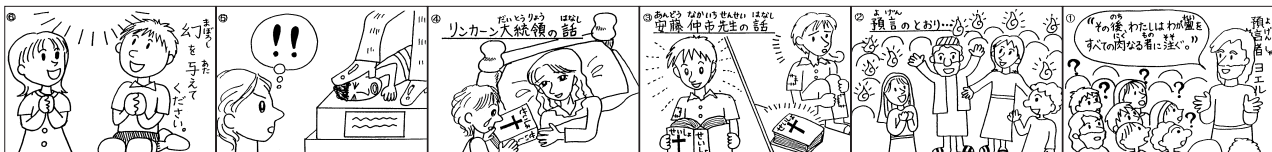
●聖霊に満たされて(例話①)

安藤伸市先生の励まされる証です。戦争中の苦しいことや、貧しいことや、体が弱ったりしたこと、「ああ、自分の人生もう終りなのかな、私の人生も夕暮が来ておしまいかな」と思っていた時、たった一冊、没収されないで残っていた聖書を手にして開き、読んでいきました。「夕暮になっても、光があるからである」(ゼカリヤ14・7)

のみ言葉が目と心に飛び込んできました。み言葉と共に、豊かな聖霊が魂に満ち満ち、先生はそこから立ち上がられました。聖霊によつて夢を見つづけて、戦後35年間、世田谷中央教会を牧し、夏には香登修養会で、霊に満ちたご奉仕をエネルギーに成さすてくださいました。(安藤伸市説教集①21頁参照、いのちのことば社)

●(例話②) エイブラハム・リンカーン大統領「エブ」これは彼の愛称です。彼が9才の時、お母さんは神様のもとに召されて行く前に、こう呼んで、彼に大切なことを語りました。「エブ! ここにいらつしやい。母はあなたに何の財産も残せないけれど、あなたは毎日、この聖書を読みなさい。そして神と人とのお役に立つ人になるんですよ」と。リンカーン少年は母と別れて、母の言葉の通り、聖書を毎日読みました。ある日、近くの公園で一人の征服者の銅像を見掛けました。その人物の足は、ゆがんだ顔をした奴隷の頭を踏みつけていたのです! その時、少年の心に「幻」が神によつて与えられました。その後、「奴隷解放」の戦いに勇ましく立ちあがり、その幼い日の「幻」が実現したのは、1863年のことでした。

聖霊なる神様の霊が、私たちにも注がれる時代に生かされています。私たちもしっかりお祈りをしましょう。幼い私たちにも、神様のための、人々のためのすばらしい幻が与えられますように。み言葉の約束をいただいて、ひたすら祈って、神様からのよい幻が実現していきますように! それは多くの人々のための祝福となっていくからです。(ブレイズワールド25)



聖書 使徒2・1～4
テーマ 聖霊降臨(ペンテコステ)

序論

(金井)

〈五旬節〉(ペンテコステ)は過越から数えて50日目に行われる祭りであり、ユダヤ教では神がシナイ山でイスラエルに律法を与えられた記念日とされている。紀元30年のこの日に聖霊が降臨されてキリスト教会は誕生した。使徒行伝に記されている記録から教会の本質について学びたい。

一、神に召された者の集まり

ルカは、キリスト教会が誕生する過程において、イエスの弟子たちが一緒に集まっていたことを繰り返し記して、強調している(1・6、14・15、2・1)。和訳聖書で「教会」と訳されている原語はギリシア語の「エクレシア」である。これは70人訳聖書(旧約聖書のギリシア語訳)においてイスラエルの「集会」や「会衆」を意味するヘブル語「カハール」の訳語として用いられた語である。すなわち、キリスト教会はイスラエルに代わって選ばれた新しい神の契約の民なのである。

最近結婚式場でも「教会」と名付けられているが、「教会」とは本来、建物でも法人組織でもない。「教会」とはイエスをキリストと信じて告白する「人々の集まり」なのである(マタイ16・18、18・17)。聖書は、孤高を保つキリスト者というものを教えていない。キリスト者＝教会

は共に生きることによって召されている存在である。〈みんなの者が一緒に集まっている〉ところに〈聖霊〉が降臨されて、教会は誕生したのである。

教会が人の集まりである以上、問題が皆無ということは無いだろう。しかし、問題があるからといって、教会を離れ、独り静かに信仰生活を守ろうなどと考えるはならない。私たちキリスト者は、そのキリスト者としての召しのゆえに、どんな理由があるにせよ、決して集會を軽視してはならないのである(ヘブル10・25)。

地方の教会や開拓の教会など、人数が少なくても、キリスト者が共に集まるところに主は臨在され、豊かな恵みを注がれる(マタイ18・19・20)。病者や高齢者の訪問・交わりも大切にしたい。

二、礼拝共同体

「交わり」(コイノニア)は教会の本質である。ただし、教会は烏合の衆ではない。ただ人が集まって聖書を学ばばよいというものではない。教会を真に教会たらしめているものは、私たちキリスト者の集まりの中心に臨在される〈聖霊〉である。〈聖霊の交わり〉(Ⅱコリント13・13)が無ければ、どんなに多くの人が集まっても、それは教会ではない。〈わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである〉(Ⅰヨハネ1・3)。

聖なる三位一体の神との交わり、すなわち礼拝こそ教会の中心的な営みである。

三、宣教共同体

イエスの弟子たちは10日間ひたすら神に祈り、

約束の〈聖霊〉を待ち望んだ。その結果、〈五旬節の日〉に〈突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起つてきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった〉のである。

ここでは〈聖霊〉の働きが3つのものに象徴されている。〈風〉は人を生かす神の息吹である(創世記2・7、エゼキエル37・9、ヨハネ3・8)。〈炎〉は聖なる神の臨在である(出エジプト3・2、13・21、19・18)。聖霊の火によって人はきよめられる(ルカ3・16・17)。〈舌〉は全世界の人々に向かって発せられる神の言葉である。

〈すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した〉。この時、ヘブライスト(ヘブル語とアラム語を主として用いるパレスチナ地方出身のユダヤ人)であるガリラヤ人たちが外国語で〈神の大きな働き〉を語り出した。世界の各地から祭りに集まっていた離散のユダヤ人たち(ディアスポラ)はこれを聞いて非常に驚いた。〈聖霊がくだると〉、キリスト者は〈力を受けて〉、〈地のはてまで〉、キリストの〈証人〉となるのである(1・8)。教会の中心的使命は宣教である。

結論

教会には〈天から〉降られた聖霊が臨在しておられる。それゆえ教会は天的な性質を持っている。教会は地上において天国を代表する公的機関なのである。神に召された私たちは共に神を礼拝し、聖霊に満たされて、人々に福音を伝えていこう。

6月

4日 聖書講解

研究資料

(足立)

ペンテコステは、しばしば教会の誕生と言及される。十二人の使徒（イスカリオテ・ユダに代わりマッテヤ、参照1・26）とその他無名の兄弟姉妹たちが多数、主イエスの命令通りに一つ所で聖霊の降臨を祈り待ち望んでいたと思われる。その彼らに聖霊なる神は、目に見え、耳に聞こえるしるしを伴って臨まれた。これは主イエスの約束（1・5、8、ルカ24・49）の成就であった。ここから教会の宣教のみわぎが始まった。

テキスト

1 五旬節（ペンテコステ）とは、大麦の収穫の初穂をささげる過越の祭りから五十日目と言うことである。すなわち過越節後の最初の日曜日から数えて五十日目祝われるので、その名がある（参照レビ記23・15―21、申命記16・9―12）。**みんなの者が一緒に集まって** この場所が最後の晩餐が行われた二階の広間（ルカ22・12）か、或いは弟子たちが滞在していた屋上の間（1・13）と同じ所かどうかは断定できない。ルカは一連の状況を説明せず、出来事だけを伝えている。おそらく彼らは心を合わせて、祈りに専念していたのであろう（参照1・14）。

2 これはまさしく聖霊の降臨である。ここで風そのものが吹いたわけではない。強調点は、その出来事の客観性にある。聖霊降臨は聞き取れるものであった。聞き取れる顕現が、突然天から到来したことから記されている。当時風が神の霊を象徴するものとして見られていたのは確実（参照

エゼキエル37・9―14、ヨハネ3・8）。ここでルカは、弟子たちの間に起こった神の御霊の圧倒的な臨在を伝えようとしている。この出来事は弟子たちが今まで経験したことがない人格的で力あるものであった。

3 聖霊の降臨を伝えるもう一つの象徴は、火である。一世紀のユダヤ人の間では、聖なる臨在の象徴として火はよく知られていた（参照出エジプト3・2―5、13・21、19・18、24・17、40・38、列王上18・38―39、エゼキエル1・27）。ここで火は **分れて** と記されている。大切な点は、聖霊の臨在が分かれて **ひとりびとりの上にとどまった** ことである。主イエスによる新しい契約のもとでは、聖霊は信者一人一人の上に個人的に注がれる。このことは決して十字架に贖われた個人と教会を分離するものではない。むしろここではペンテコステの出来事により、神と信仰者の間に聖霊による人格的な交わりが与えられたことを強調している。ここは見える顕現による記述。

4 聖霊が降臨した外面的なしるしとともに、弟子たちの上にもたらされた内的な現実が描写されている。すなわち **一同は聖霊に満たされた** のである。「満たされ」という動詞は、重要である。ルカ伝や使徒行伝の至るところで、聖霊による力づけを記し（ルカ1・15、使徒9・17）、或いは神のことは語るため奮い立たせられるときに使われている（使徒4・8、31、13・9）。ペンテコステの場合もしかりである（参照2・5以下）。この動詞が関係するところでは繰り返し聖霊の満たしが記され、或いは聖霊の満たしの継続的な過程に使われている（使徒13・52、エペソ5・18）。

使徒6・3、5、7・55、11・24、ルカ4・1の言及に関しては全て、既に聖霊に満たされてきた人が特別な働きや宣言のために新しく満たしを受けることを意味している。2・4で「聖霊に満たされる」と呼ばれることが他の箇所では、バプテスマを受ける（使徒1・5、11・16）、或いは注がれる（2・17以下、10・45）、また授ける（10・47）と呼ばれている。換言すればこれらのことは、ルカにおいては相互交換可能であり、ルカはどのように使用している。そして専門用語としては取り扱えないし、違った霊的経験を年代順に並べるために手際よく振り分けられている。つまり聖霊に満たされるという基本的行為が、様々な言い回しによって表現されているに他ならない。

いろいろの他国の言葉で語り出した これは聖霊に満たされた弟子たちが他の原語で語ったことに言及している。2・5以下を見れば、聴衆がこれらの人びとが語ることを聞いていたことがわかる（参照2・7―8）。弟子たちが語った内容は「神の大きな働き」（2・11）であった。彼らは決して恍惚状態で演説したのではない。離散したユダヤ人がエルサレムに戻ってきて、ガリラヤ人が語る各国のことばで神のみわぎを聞くことは、誰も予想していなかった。

参考図書 F・F・ブルース『使徒行伝』聖書図書刊行会、Longenecker,R.N.,The Acts of the Apostles,The Expositor's Bible Commentary,Vol.9 (Zondervan),Marshall,H.,Acts (IVP),Polhill,J.B.,Acts (Broadman),Witherington,B.,The Acts of The Apostles (Eerdmans) .

6月

4日 礼拝メッセージ例

聖書 使徒行伝2:1-4
タイトル 聖霊降臨(ペンテコステ)
暗唱聖句 一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。使徒2:4
目標 預言は成就し、聖霊が降った出来事に学ぶ。

導入

(長谷川)

今日はペンテコステ。イエス様が天に昇られてから10日目に神様の約束通り「聖霊」が降ってくださった記念の日です。イースターやクリスマスと同じように教会の大切な記念日です。

今日はその日に何が起こったのかを聖書から学びましょう。素晴らしい出来事だったのです。

みんなが一緒に集まっていると

イエス様は十字架にかかり、死んでよみがえってくださったから40日間、弟子たちと共にいてくださいました。そして、天に昇られる日が来た時、「エルサレムから離れないで、父の約束（聖霊）を待っているがよい」（1・4）と弟子たちに言い残してくださいました。

弟子たちはイエス様のお言葉を信じて、一生懸命聖霊が来てくださることを待ちました。何をしていたのでしょうか。「心を合わせて、ひたすら祈をしていた」（1・14）と聖書に書いてあるように、「お祈り」をして待っていたのです。しかも、120人の人たちが「一団となって集まっていた」（1・15）とあります。心を一つに合わ

せてひたすらにお祈りをしたのです。一緒にいても心がバラバラ、というのではなく、「聖霊の神様、来てください」と同じ心を持ってお祈りをしていたのですから力強かったと思います。

来てくださった「聖霊」

120人が心を合わせて祈り始めて10日目に不思議な出来事が起きました。突然「ゴーツ」と激しい風が吹いてきたような音が天から聞こえ、家内いっばいに響きわたりました。また、舌のようなものが炎のように分かれて、ひとりびとりの上にとどまったのです。このことは「イエス様が約束してくださっていた聖霊」が来てくださったしるしだったのです。

弟子たちはなんと、今まで話したことのない外国の言葉を使って神様をほめたたえ始めました。しかも、弟子たちは大喜びでイエス様による救いのみわざを話し出したのです。

イエス様のことを語った弟子たち

弟子たちはその日以来すっかり変わりました。喜びと力に満たされてイエス様のことを大胆に話せるようになったのです。人を恐れて弱虫になっていた人も、勇気がわいて話せるようになっ

ていたのです。まわりの人がその様子をみて驚いていると、弟子の一人のペテロが立ち上がって「みなさん、聞いてください！」とペンテコステの様子を力強く話しました。ペテロは、イエス様が十字架にかかられる前の日に裏切って、イエス様を3回も知らないと言って逃げた弟子でした。その時、イエス様に見

つめられて泣いたペテロでした。他の弟子たちも、みんなイエス様を裏切った人たちばかりでした。でも、「助け主なる聖霊」が来られたこの日から弟子たちは変わりました。

ペテロの話を聞いて、その日イエス様を信じた人は3千人もありました。そして、その日に「教会」が誕生したのです。ペンテコステは忘れられない記念日となりました。

まとめ

青山学院の基礎を作ったR・S・マクレイ宣教師は、日本伝道を目指していた四番目の息子さんを風邪で亡くしました。余り急な出来事に先生夫妻は非常に悲しみ「神よ。息子ジョージに代わって日本伝道のために誰かを日本に送ってください」と涙ながらに祈りました。このことをジョージの通っていた教会の教会学校の校長先生が知り、教会でそのことを話しました。

すると一人の大学生がとても感動し、「神様、私をジョージの代わりに日本へ行かせてください」とお祈りしました。この青年はジョージの親友でした。その後、彼は日本に宣教師として来日し、横浜でイエス様を伝えると共に、障がいを持たれた方々のために尊い働きをしました。愛の宣教師G・F・ドレーパー先生がその人です。

聖霊の神様が人の心の中に来てくださるとき、その人はイエス様を伝える愛の人に変えられるのです。
♪おことばしんじゅ (こどもさんびか42)



聖書 ルツ1・15～22
テーマ 花のように

序論

(鎌野)

「花の子どもの日」の起源については、毎年紹介されているので、今年は省略したい。昨年は、子どもに関するテキストが選ばれたが、今年は花に焦点をあてた学びである。今日、病院や公共施設に花を持って行く教会もあるだろう。確かに花は人々の心を慰める。旧約聖書に登場するルツは、まさにその花のような女性であった。どのような点で、ルツは花のようだったのか。

一、風雨に耐える

ルツは神の選びの民であるイスラエル人ではなく、異邦のモアブ人だった。彼女は、飢饉から逃れてモアブの地に移住していたエリメレクとナオミ夫妻と親しくなり、二人息子の一方の嫁となる(もう一人の嫁は、オルパという名であった)。ルツがこの結婚を決断した時、すでにエリメレクは死んでいた(3節)。異国人であり、豊かでもなく、また父親もいない男性との結婚に踏み切ったルツは、最初から苦難に立ち向かっていく勇氣をもっていた。だが不幸なことに、結婚後しばらくして、夫にも先立たれてしまう。前後して、オルパもまた同じ境遇となった。夫と二人の息子を失ったナオミは、ついに故郷のベツレヘムに帰る決心をする。「自分の母の家に帰れ」と説得するナオミに、オルパは泣く泣く従うが、ルツはどうしても一緒に行くと言っているのである。

温室育ちの花は別として、野山に咲く花に風雨は容赦なく吹き付ける。しかし、それに耐えて、美しい花を咲かせるのだ。地下にある根が、茎や花を支えていることを忘れてはならない。

二、神が保たれている

ルツはなぜ、住み慣れた町、親しい人々を離れるという大決心をすることができたのだろうか。それは、〈あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です〉という一言が見事に説明している。エリメレク一家と会ったその日から、ルツは、自分の知らなかったものを彼らに感じていたに違いない。それは、天地を創造され、今も生きておられる唯一の神を信じる信仰に裏打ちされた生活だった。幸いであれ、不幸であれ、神が導き、保っておられる一日一日なのである。命のない偶像の神しか知らなかったルツにとって、全く新しい生き方がそこにあった。だからこそ、彼らの息子と結婚し、どんなに説得されても、ナオミについていこうとしたのである。もはや、モアブ人の生活には戻れなかった。再び偶像の神を礼拝することなど、まっぴらごめんだった。

野山に美しく咲き誇る花は、人間のような理性も意志もない。しかし、「あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さる」のだ(マタイ6・30)。神が保ってくださるとの信仰を、ルツはナオミから学んでいた。

三、喜びを与える

彼らがベツレヘムに着いたとき、町は大騒ぎに

なった。10年ぶりに人々が見たナオミは、不幸な出来事のために、昔の面影を失っていたのだろう。(これはナオミですか)と問わざるをえないような状況だった。ナオミもそれを知っているからこそ、〈わたしをナオミ(楽しみ)と呼ばずに、マラ(苦しみ)と呼んでください〉と言ったのである。彼女の、〈全能者がわたしをひどく苦しめられたから〉という言葉は、不信仰に聞こえる。しかしナオミは、それでも神が全能者であることを信じており、このお方から離れようとはしなかった。ちょうどルツが、どんなに厳しい道であろうと、ナオミを離れなかったように。

この後、2章から全能者の不思議な導きが次第に明らかになってくる。ルツは、親戚にあたるボアズの畑に「はからずも」(2・3) やってきて、彼と出会い、最後には彼と結婚することになる。それはまさに全能者のご計画だった。そして、一人の男の子が誕生し、人々はナオミに、「主はあなたを見捨てずに、きょう、あなたにひとりの近親をお授けになりました」(4・14)と叫ぶのである。この子は、どれほどの喜びをナオミに与えたことだろうか。彼女はマラではない、あくまでもナオミである。そしてオベデと命名されたこの子は、ダビデ王そして主イエスの祖先となる。

結論

誰かに贈る花は、ただ一本でもその人に喜びを与える。神がその花を美しく育ててくださったからである。私たちもこの花のように、ルツのように、苦しみを通して喜びを与える者となろう。

研究資料

(石田)

ルツ記は聖書中、エステル記と並んで女性の名前を冠せられた書卷である。しかもそれがモアブという異邦人の女性であるところがユダヤ人の排他性を考慮すると興味深い。ルツは異邦人でありながらイスラエルの民に加えられ、しかもダビデの曾祖母となり、メシヤの系図に入れられた(マタイ1:5)。ここには新約時代の異邦人の救いを暗示するところがある。ルツ記の眼目の一つは、一人の女性の信仰と愛にもとづく献身が祝福されて、神の救いの歴史に用いられたことである。このことは誰でもキリストにあるならば神の民とされ、神の作品として造り変えられ、良い行いをもって神と人にと仕えることができるようになる、と、教えているのではないか。

テキスト

15 あなたも相嫁のあとについて帰りなさい 義母のナオミが実家に帰るように勧めた理由は、ルツの夫になれる子どもがナオミにはいないこと、モアブに帰ってそこで再婚すれば夫の保護を受けられること、しかしユダの地に行けば律法によってモアブ人はイスラエル人と結婚ができないことなどである。二人の嫁は共にナオミを心から慕っていたが、弟嫁のオルバはナオミの忠告に従った。ルツも同じようにするよう重ねて勧めている。ナオミは自分に対する嫁たちの愛と献身に感謝しつつも、彼女たちの幸せを優先させている。

16 あなたの民はわたしの民、あなたの神はわた

しの神です これは「自分の民と自分の神々」(15)という表現に対応する答えである。ルツが心情的にも、信仰的にもナオミと心を一つにしていることの証しである。もともと異邦人であるルツは、姑のナオミと一緒に生活する中で、イスラエルの神を自分の神とするようになっていた。これはその信仰の告白でもあるので、ナオミの信仰的な感化がうかがえる。

17 あなたの死なれる所でわたしも死んで、そのかたわらに葬られます ルツがナオミを最後まで世話をするという決心は固かった。そのためには未亡人として生活の不安定なこと(2:2)、外国人として差別を受けること(2:10)、再婚できる見込みもなく、自分の生涯をナオミのために犠牲にすることを覚悟しなければならなかった。そのようないくつものデメリットをものともせずナオミについて行こうとするルツの決心の中に、神の摂理が働いていたことが、後になってわかってくる(2:20)。

18 ナオミはルツが自分と一緒にいこうと、固く決心しているのを見たので 16節のルツの信仰に裏づけられた決心を、ナオミはこれ以上翻すことができないと判断した。

19 ついにベツレヘムに着いた ベツレヘムはナオミとその夫エリメレクの出身地であり、そこで家庭を持った。そしてエリメレクの親戚のボアズとやがて結ばれるルツとの間に、ダビデの祖父オベデが生まれる。ダビデはこの町で生まれ育ち、やがて王として立てられ、50年余り続く王朝を創始する。それゆえベツレヘムはダビデの町と呼ば

れるようになった。そしてついに彼から千年後にこの町で、ダビデの子孫としてイエス・キリストが誕生する。町はこぞ彼らのために騒ぎたちこの騒ぎは、10年ほど離れて暮らしていたナオミとその家族の消息を知りたいという思いや、彼女の連れて来たモアブ人の女性への好奇心なども手伝ったのだろう。やがてルツの良い評判は町に知れ渡る(2:11)。これはナオミですか あなたは本当にあのナオミですかという響きがある。夫と二人の息子に先立たれるという痛手を受けて顔に悲しみが刻まれていたからかもしれない。

20 なぜなら全能者がわたしをひどく苦しめられたからです ナオミは一連の苦難を神からの懲らしめと受け取っている。彼女は、飢饉のために神からのゆずりの地を離れたこと、寄留先で息子たちに異邦人の妻を迎えたことなどがその原因ではないかという罪責感を持っていたのであろう。同じ意味で彼女は「主の手がわたしに臨み、わたしを責められた」(13)と言っている。全能者(シャツダイ)という言葉には、「力強い」という意味がある。力強い神の前に碎かれたという思いを表しているのかもしれない。

22 大麦刈の初めに イスラエルの収穫期は、大麦刈りから始まる。だいたい4月ごろで、過越の祭りの時期でもある。ナオミは生活基盤を失ったベツレヘムで生活を立て直すためには、この時期が良いと判断した(6)。しかも長年の飢饉がやんで、収穫が回復したという知らせを聞いたからでもある。この大麦刈りの落ち穂拾いから、ルツとボアズの出会いが生まれ、ルツ記の本题が展開する。

聖書 ルツ1・15～22

タイトル 花のように

暗唱聖句 あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です。

目標 花のように美しいルツのように生きよう。

導入

(長谷川)

今日は6月第2聖日、花の日・子どもの日です。きれいな花を咲かせて私たちを慰めてくださる神様に感謝しつつ、私たちも他の人を愛し、慰める人になっていきましょうね。今日のお話は「花のようなルツさん」の登場です。

ルツの結婚

モアブ(現在のヨルダン)の地にルツという女性がいきました。ルツは、飢饉のためにユダヤのベツレヘムの地から、モアブに移って来たイスラエル人のエリメレクとナオミ夫婦と親しくなりました。夫婦には二人の息子マロンとキリオンがおり、ルツはマロンと結婚しました。その時には、ナオミのご主人エリメレクはもう亡くなっていました。

イスラエル人は神様選ばれた特別な民族でしたが、ルツはモアブ人です。異邦の人でしたからいろんな意味で勇気のいる結婚だったと思います。その上、結婚してしばらくして、夫のマロンが亡くなり、弟のキリオンも亡くなってしまいました。何て悲しいことが続いたのでしょうか。

二人の息子を失ったナオミお母さんの悲しみ、

夫を失ったオルバさんとルツの悲しみ、それはそれは大きいものだったと想像できます。

やがて、ナオミお母さんは飢饉もおさまったので、故郷の自分の親戚がいるベツレヘムに帰ることにしました。老後のことも考えてそうした方がよいと思ったのでしょうかね。ところが、ルツが「一緒にあなたの民のところへ帰ります」つまり、「お母さんと一緒に外国へでもついていきます」と言いました。ナオミお母さんは驚いたと思います。「自分の母の家に帰りなさい」と言われ、オルバさんは泣きながらそうしましたが、ルツはナオミお母さんにずっと付いて行くことに決めました。ルツさんは勇気ある女性だったのですね。

お母さんの神様を信じます

ルツは勇気だけで自分の知らない国に行くことにしたのでしょうか。実はそうではないのです。ナオミお母さんの信じている神様があまりにも素晴らしい神様だと知ったのでそう決めたのです。ルツの生まれ育ったモアブでは、まことの神様を信じない偶像の神々を礼拝する生活をみんながしていました。ルツもナオミたちに出会うまではそうしていました。でも、ナオミの家族を見て「まことの神様を信じる生活の素晴らしさ」を知ったのです。貧しくても、喜んで神様を礼拝しながら生きているナオミの家族の本当の幸せな姿をルツはじつと見ていたんだと思います。

それで、ナオミお母さんからベツレヘムへ来なくっていいよ、と言われた時「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です」と答えたのです。これは「お母さんの神様をわたしも信じます!」と告白していることなのです。ナオミお母

さんは涙が出るほど嬉しかったのでしょね。

ナオミとルツは幸せに

ルツと共に麦刈りの頃、故郷に戻ったナオミを見て、町は大騒ぎになりました。夫と息子たちを亡くしたナオミがやつれていたからでしょうね。

ところが、神様は信じ抜くナオミとルツをお見捨てにはなりません。貧しいためルツが、人の畑に行つて麦の落ち穂を拾わせてもらうのですが、「たまたま」親戚のボアズさんの畑へ行つたことから素晴らしいことが起こったのです。

ボアズさんはルツのナオミを支える優しさと美しい花のような生き方に感動し、また、ルツの誠実を知り、お嫁さんに迎えました。二人は結婚し、男の子が生まれ「オベデ」と名づけられました。この「オベデ」はなんとダビデ王の祖父、主イエス様の祖先となったのです。「たまたま」入った畑がボアズさんの畑だったのではなく、神様がナオミとルツを幸せにするために「わざわざ」その畑に導いてくださったのでした。

まとめ

ルツは野山に咲いている「ユリ」のような人ですね。雨風にも負けず、道行く人をそっと、力強く、しかも優しく慰めてあげる「花のようなルツさん」でした。私たちも、イエス様に助けていただいてこんな生き方が出来るといいですね。♪神さまはのきの♪

(ホーリネス子どもさんびか10)



聖書 創世記22・1～19
テーマ 父と子

序論

(金井)

今日は父の日である。信仰の父アブラハムの生き様を通してキリスト教父親学の一端を学びたい。

一、完全な愛

主なる神はアブラハムをカルデヤのウルから召し出し、ハランでの滞在を経て、カナンの地に導かれた。主は彼に、「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」と言われた(12・2)。アブラハムはハランを出た時すでに75歳であったが、アブラハム夫婦には子どもがいなかった。当時の社会においては、子どもが与えられることは最大の祝福とされていた。しかし、彼らがカナンに着いた時、主はアブラハムに、「わたしはあなたの子孫にこの地を与えます」と言われたのである(12・7)。

アブラハム夫婦は神の約束の実現を長年待ち続けた。そして、アブラハム100歳、妻サラ90歳にして、ようやく世継ぎの〈ひとり子〉が彼らに与えられたのである。アブラハムは神が言われたとおりにその子を〈イサク〉(「彼は笑う」の意)と名付けた(17・15～19、21・1～7)。この老夫婦の喜びの笑顔が想像できよう。神はイサクについて、「わたしは彼と契約を立てて、後の子孫のために永遠の契約としよう」と言われた(17・19)。

ところが、アブラハムがペリシテの王と契約を結び、平和を確立した時に、神はアブラハムに、「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」と言われたのである。

人身御供は忌むべき異教徒の習慣ではないか？

「この子は神との契約を受け継ぐべき世嗣(よつぎ)ではないか？」と、全く不可解な命令に思われる。しかし、神は、アブラハムの神に対する愛を試みられたのである。

神は私たちに最高の愛を求めておられる。私たちキリスト者には神以上に愛する者があつてはならない(マタイ10・37)。親が神を真実に愛さず、自分や子どもを神以上に愛するなら、子どもは神を敬わず、親をも敬わない者に育ってしまう。私たちの愛情は聖別されなければならない。

二、完全な服従

アブラハムはいさぎよく神に従った。彼は〈朝はやく起きて〉、その子イサクを連れ、〈立つて神が示された所に出かけた〉。アブラハムは手に〈火と刃物〉を携えて山を登った。息子イサクは〈燔祭のたきぎ〉を背負って父親についていく。

イサクはもう立派に成長している。彼は父に尋ねた。〈火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか〉。父は答えた。〈子よ、神みづから燔祭の小羊を備えてくださるであろう〉。

アブラハムが〈祭壇〉を築くと、イサクはなされるがままに縛られ、〈祭壇〉の上に載せられた。息子もまた、神に完全に服従したのである。〈アブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってそ

の子を殺そうとした時、主の使が天から彼を呼んで言った、「アブラハムよ、アブラハムよ」。〈わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った〉。アブラハムは神のテストに合格したのである。

三、完全な報酬

神にはイサクをよみがえらせる力があると、アブラハムは信じた(ヘブル11・19)。しかし、たとえそうならないとしても、彼は神に服従した。この信仰を神は喜ばれた。神は〈一頭の雄羊〉をアブラハムにお与えになった。彼は〈それをその子のかわりに燔祭としてささげた〉。この羊はキリストの予型である。父なる神は私たちの罪を贖うために〈ひとり子〉をカルバリ山の十字架(あがな)上に犠牲とされたのである。〈主の山に備えあり〉！

主は彼に言われた、〈あなたがこの事をし、あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかったのだから、わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにする。あなたの子孫は敵の門を打ち取り、また地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである〉。信仰の報酬は豊かである。

結論

聖書は、子どもの健全な成長のために父親が果たすべき独自の役割があることを教えている。親子共々神を愛し、神に従い、神の祝福を受け継ぐ。

6月

18日

聖書講解

研究資料

(石田)

神は私たちを段階的な信仰の試みによって完成へと導かれる。今日の個所は、アブラハムが最大の試みを経て信仰の父とされたところである。

テキスト

1 神はアブラハムを試みて「試練に会わせられた」(新改訳)、神の試みの目的は信仰者の「心のうちを知り、その命令を守るかどうかを知るため…ついにあなたはさいわいにするため」である(申命記8・2、16)。神から奇跡的に与えられたイサクをさえ献げて、何ものよりも神を愛するかどうかを試すためである。だからこの試みのあと神は「あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」(12)と言われたわけである。記されている範囲において、これは彼にとって最終にして最大の試練であった。

2 あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクがアブラハムにとって最愛の存在であることを神はご存知である。彼を燔祭としてささげなさい。アブラハムはイサクに生れる者が彼の子孫となえられるという約束をいただいていた(21・12)。神ご自身が授けたイサクを、今度は焼き尽くすいけにえとして献げるように命じることが、人間的に考えたら理不尽きわまる。しかしそこを超越して神を信頼し、信仰を形にすることが求められた(ヤコブ2・14～26)。

3 アブラハムは朝はやく起きて…立って神が示された所に出かけた。神の言葉が夜のうちに臨んだことが推測される。神が何を意図しているのか

がわからずにもだえ苦しみ、その言葉に従うかどうかという葛藤(かっとう)があったかもしれないが、彼は従う道を選び取った。

5 わたしとわらへは向こうへ行つて礼拝し、そののち、あなたがたの所に帰ってきます。アブラハムはイサクがどういう形かわからないが、生きて帰されることを信じていた。なぜならイサクの子孫を祝福するという神の約束が与えられていたからである。ヘブル書は「彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていた」と言っている(11・19)。

8 神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであらう。これはイサクの質問に答えてアブラハムの口から出た言葉であることが注目される。アブラハムも答えて困って言ったことであろうが、どんなに願わしくない状況の中でも神は真実で、最善をなされるという信仰に裏づけられている。しかもこの言葉が現実となる(13)。

10 アブラハムが手を差し伸べ、刃物を執つてその子を殺そうとした時。彼は神がイサクをよみがえらせてくださることは信じていたが、死なせずにはすむとは思っていなかった。結果的には生きて帰されたが、この時点で彼はイサクをいけにえとして献げ切ったと神は見なした。だから神は「あなたのひとり子をささへ、わたしのために惜しまない」と評価したわけである(12)。彼は親であることと信仰者であることのジレンマで胸は張り裂けんばかりであっただろう。この胸中は、神が御子を十字架に渡されたみ心のうちを想像させる。

12 あなたが神を恐れる者であることをわたしは

今知った。イサクを屠(ほ)ろうとする行為によって、神はアブラハムが心の底から神に信頼し、従っていることを確認した。彼は信仰と従順と献身を試す神の試みを乗り越えたわけである。これは信仰者の模範となった(ヘブル11・17～19)。またその行いによって彼の信仰が本物であることが確認された(ヤコブ2・21)。

13 アブラハムは行つてその雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてさげた。いわば神の方からいけにえを備えて、アブラハムに献げさせてくださったのである。この雄羊はイサクの身代わりであるが、神はイサク自身であると見なし、同時にアブラハムの全き愛として受け入れた。

14 アブラハムはその所の名をアドナイ・エレと呼んだ。エレには「備える」という意味のほかに「見る」という意味がある。神はアブラハムの心を見るために試みたわけである。

17 わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして…アブラハムが神の試みに合格したことによって、祝福の担い手としてふさわしいことが認められた。事実、彼の子孫は民族と国家を形成し、霊的な子孫であるクリスチャンの数はおびただしい。

18 地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであらう。これはアブラハムへの契約の更新。これまでの契約は12・1～3、4～5、13・14～17、15・1～21、17・1～27。これは新約において「アブラハムの受けた祝福が、イエス・キリストにあって異邦人に及ぶ」と解き明かされている(ガラテヤ3・14)。

6月

18日 礼拝メッセージ例

聖書 創世記22・1～19
タイトル 父と子
暗唱聖句 子よ、神みずから燔祭の小羊を備えてくださるであらう。
目 標 信仰の父と信仰の子の姿に教えらる。

導入

(長谷川)

今日は父の日です。私たちのために一生懸命働いてくださるお父さんやおじいちゃん方に心から感謝しましょうね。今日は、「信仰の父」と呼ばれた旧約聖書に出て来るアブラハムと、その子イサクの「信仰の姿」を学びたいと思います。

イサクをささげなさい

アブラハムとサラ夫妻には子どもがなかなか与えられませんでした。なんとアブラハム100歳、サラ90歳の時に神様が約束してくださった通り、子どもが与えられました。名前はイサク。「神様が笑わせてくださった」という意味です。どんなに嬉しかったことでしょう。「目の中に入れても痛くない」という、子どもがとてもかわいいことを表わす言葉がありますが、アブラハムとサラもそう思っているイサクをかわいがり育てたと思います。

ところが、ある日、神様が重大な命令をアブラハムに告げられました。「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい」と言われたのです。「燔祭」とは、祭壇の上で火によって焼き尽くす、ささげ物のことなのです。

「えっ？なんてひどいことを神様は？」と思いますね。やっと与えられた、大切な宝のような息子イサクを殺してしまえ、とは……。神様はアブラハムをテストされたのです。神様に従うかどうかを見るために「イサクをささげなさい」と言われたのです。アブラハムは悩み、苦しみ、お祈りして一晩を過ごしました。アブラハムのこの時の気持ちを感じると心が苦しくなりますね。

神様に従ったアブラハム

アブラハムは神様のご命令に従うことに決めたのです。次の朝、「立つて神が示された所に出かけた」③と書いてあります。

アブラハムは、神様が今まで全てのことを悪いようににはされなかったことを思い起して、「神様を信じて」お従いすることにしたのです。

アブラハムは手に「火と刃物」を持ち、イサクは「燔祭のたきぎ」を背負ってお父さんについて行きました。イサクはもう大きくなっていましたから、「どうして献げ物の小羊はいないのかな？」と不思議に思い、お父さんにそのことを聞いたのです。すると、アブラハムが「神様がちゃんと用意して下さるよ」と答えたので、イサクもそう信じてモリヤの山へと登って行きました。

山に到着するとアブラハムは祭壇を築き、たきぎを並べたかと思うと、イサクを縄で縛ってその上に寝かせました。イサクも逃げようとはしませんでした。お父さんが神様を信じて従ったようにイサクもお父さんを信じて従ったのです。想像するだけで涙が出てきますね。

神様のテストに合格

お祈りを済ませたアブラハムがナイフを振り上げイサクを殺そうとした、まさにその時、「アブラハムよ、アブラハムよ」と天から声がしたのです。

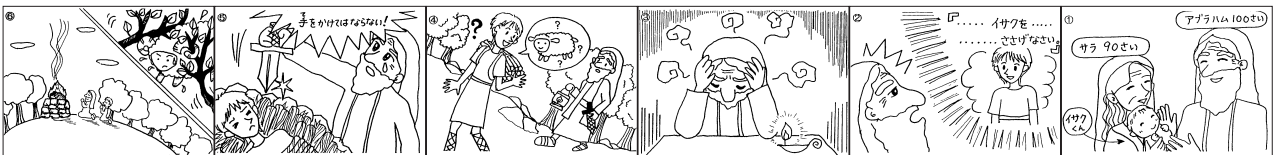
「わらべに手をかけてはならない。…あなたの子、あなたのひとり子をささえ、わたしのために惜しまないので、あなたが本当に神を恐れる者であることをわたしは今知った」と。神様はアブラハムが何よりも、誰よりも神様を第一にしていることをわかってくださり、アブラハムが神様を心の底から愛し、信じ抜いていることを喜ばれました。

この時アブラハムが目をあげて見ると、後ろに、角をやぶに掛けている「二頭の雄羊」がいるのに気付きました。誰がモリヤの山に雄羊を連れて来たのでしょうか？もちろん、神様がちゃんとアブラハムたちが来る前から用意してくださっていたのです。「雄羊」は神様のテストに合格したアブラハムとイサクへのごほうびだったのです。

まとめ

モリヤの山の出来事は驚くようなことでした。とても厳しい神様のテストに従った父と子に、神様は「あなたのひとり子をも惜しまなかったの、わたしはあなたを大いに祝福する」と約束してくださいました。そして、その通りになりました。

私たちも「神様はきつとよいようにしてくださる！」と信じたアブラハムとイサクの信仰に習って行きましょうね。
♪主にしたがいゆくはナ (子どもさんびか53)



聖書 使徒2・29～42 テーマ 教会誕生

序論

(金井)

聖霊が降臨された紀元30年のペンテコステにエルサレムで教会は誕生した。初代教会は生まれたばかりの赤子のように元気な声を上げて成長した。その姿を学び、私たちも彼らと同じ命に生かされ、同じ使命を負っていることを覚えない。

一、イエス・キリストの宣証

ペンテコステの日に、使徒ペテロは聖霊に満たされて、人々に力強くキリストを証した。このペテロの説教には特別に重要な意義がある。これは教会が世界に向かって発した最初のメッセージであり、その後の宣教のモデルとなったのである。キリスト教の中心的使信について確認しよう。

① イエスの生と死

ナザレ村出身のイエスは〈数々の力あるわざと奇跡としるし〉を行った(22)。彼はユダヤの権力者によつて捕らえられ、ローマの権力者によつて十字架刑に処された。これはユダヤの人々にとつて周知の事実であったが、ペテロはそれが神の計画によるものであることを証した(23)。

② イエスの復活

この50日ほど前にペテロは、イエスを知らないと言つて裏切り、逃げ隠れた。しかし、復活されたイエスに会つて彼は変わった。彼はイエスから旧約のメシヤ預言の解釈を聞いた(ルカ24・44～47)。それで彼は、詩篇16篇8～11節(25～28)、

12篇11節(30)を引用して、イエスの復活が預言の成就であることを論証した。〈このイエスを、神はよみがえらせた。そして、わたしたちは皆その証人なのである〉。

③ イエスの高擧

イエスは復活後40日間、多くの人々に姿を現された後、オリブ山から昇天された。御子イエスは今や、父なる神の右に座しておられる(34～35)。すなわち、イエスは全天地を支配する王座に就かれたのである(ピリピ2・9～11)。これは詩篇110篇1節の預言の成就であった。ペテロの説教の中心は、イエスが〈主またキリスト〉であることの宣証にあった。〈主〉(キュリオス)とは70人訳聖書における神の御名であり、一般には世界を支配する者の称号であった。〈主の御名を呼び求める者は、すべて救われる〉(ロマ10・13)。

二、具体的な勧告と応答

私たちが救霊者となるためには、「真理の最小限」と「わざの最小限」を熟知していなければならぬ(ウイルクス著『救霊の動力』参照)。聖霊によつて覚醒^{かくせい}させられた魂は、〈兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか〉と今も叫んでいる。ペテロはこの問いに明確に答えた。〈悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によつて、バプテスマを受けなさい〉。

① 悔い改め

ペテロはユダヤの人々の罪をズバリ指摘した。「あなたがたがイエスを十字架につけて殺したの

だ」と(23)。彼らは〈強く心を刺され〉た。神の言葉は鋭い剣である(ヘブル4・12)。自分の罪を見つめることはつらい作業だが、〈神のみこころに添うた悲しみは、悔いのない救を得させる悔改めに導く〉のである(Ⅱコリント7・10)。

② 信仰告白

イエスは人類の罪を贖^{あがな}うために十字架で死に、復活された。〈イエス・キリスト〉という表現はイエスが救い主キリストであるという信仰の告白である。イエスを主キリストと信じて告白する時、その人に〈罪のゆるし〉が与えられるのである。

③ 洗礼

〈バプテスマ〉(洗礼)は本来、水に全身を浸す儀式である。それは死と再生を意味する(ヨハネ3・3、5、ロマ6・3～4、テトス3・5)。信仰をもつて洗礼を受ける者はイエス・キリストと結ばれ、〈聖霊の賜物を受ける〉のである。

三、教会の形成

〈その日、仲間に加わったものが三千人ほどあった〉。①〈そして一同はひたすら、使徒たちの教を守り〉、②〈信徒の交わりをなし〉、③〈共にパンをさき〉(聖餐と愛餐)、④〈祈をしていた〉。こうして最初の教会が形成されたのである。

結論

聖霊はイエス・キリストを証しするお方である(ヨハネ16・14、Ⅰコリント12・3)。私たちも聖霊に満たされて、大胆に人々にキリストを証しよう。聖霊によるリバイバルを求めて祈ろう。

研究資料

(足立)

使徒2・22―36はペテロの説教の中心部分である。導入として伝道における神の行為を要約し、キリストの死と復活が始まっている(22―24)。そして詩篇16・8―11を聖書の根拠として、キリストが事実希望の救い主であり、その復活を証明、提示している(25―31)。更に詩篇110・1を根拠に、復活のキリストが今や父なる神の右の座にいた救い主であり主であると描写している(32―36)。これはキリストの死と復活が結びついた福音提示である。『あなたがたが殺したナザレの主イエスを、神は復活させた』という基本的な信仰告白が、使徒行伝全体を通して見受けられる(3:15、4:10、5:30、10:39―40、13:28―30)。

テキスト

37―39 ペテロの説教は聴衆の核心を衝いた。彼らは救い主を拒絶し、十字架につけた罪を犯した。強く心を刺され、強烈な感情に言及している。聴衆の応答に対するペテロの対応は、ほとんど予定されていたかのようにであった。彼は回心経験における四つの本質を彼らに提示した。すなわち悔い改め、イエス・キリストの御名による洗礼、罪の赦し、聖霊を受けること。聖霊と洗礼の結びつきは、使徒行伝全体に連動して描写されている(参照8:12―17、29―38、10:44―48、19:5―6)。聖霊なる神は一つのパターンに縛られてはいない。しかしながら洗礼と聖霊を受けることの間には、人がキリスト信仰者になる経験に明らかな規範があると言えるだろう。

38節にある洗礼と罪の赦しの結びつきは、あくまでキリストの御名による罪の赦しが基盤となっており、洗礼を受ける根拠となる。ルカは重要なこととして罪の赦しの結びつきを、洗礼ではなく悔い改めにおいている(参照、ルカ24:47、使徒3:19、5:31)。事実使徒行伝において洗礼が罪の赦しをもたらすかのように提示されている箇所はどこにもない。悔い改めとの結びつきでない場合も、赦しは信仰と結びついている(参照、10:43、13:38―39、26:18)。38節にある支配的な概念は、悔い改めであり、他の要素はこれに続くものと思われる。悔い改めが、洗礼、罪の赦し、そして聖霊の賜物に至らしめる。ペテロがユダヤ人の聴衆に求めた応答は真実な悔い改めを含む完全な方向転換であり、救い主を拒んだことから立ち帰り、彼の御名を呼び求めることである。また主イエスの共同体への洗礼を受け入れ、聖霊の賜物分かち合うことである。ペテロはヨエル2:32(21節)の約束に訴え、自分の主張を結論づけた。ここでは約束の普遍的見地が強調されている。救いはペンテコステに現されたユダヤ人グループのためだけではなく、将来の各世代のためのものでもある。またユダヤ人だけではなく、異邦人のためのものでもある(参照イザヤ57:19、エペソ2:14、17)。

40―41 この曲った時代 とは、頑固で反逆的かつ神に不従順な世代のための旧約用語である(詩篇78:8、参照申命記32:5、ピリピ2:15)。聴衆のユダヤ人は救い主を待望しつつも彼を拒否した世代であった。

42 ひたすら…していた ここでキリスト信仰者一同は新しいのちの中で四つの実践に自分たち

をささげていたと、言われている。第一は **使徒たちの教** であった。主イエスによって教育されてきた使徒たちは、新しいキリスト者を教えるのに時間をかけた。彼らに主イエスの教えを守らせることには、以下のような主題が含まれていたであろう。すなわちキリストの復活、旧約聖書概観、キリストの証人、主イエスの地上生涯、みわざと教え、新しい共同体生活の指針等。第二は **信徒の交わり**。交わりと訳されることば(コイノニア)は、ルカ福音書・使徒行伝全体においてここだけの使用である。このことばはそれ自体は、参加することであり、或いは誰かと共通のことを分かち合うことを意味する。この場合は、使徒たちの教えを分かち合ったと考えられる。交わりとは、あまり良い翻訳とは言えない。というのは交わりとはコイノニア(共に分かち合うこと)の結果である。つまり交わりはそれ自体コイノニアではない。コイノニアは一つの活動であって、ある種の交わりを結果としてもたらすことになる。そしてみ言葉の学びや祈りという霊的な活動だけではなく、肉体の食物や他の物資を共に分かち合うことも必然的に含む(参照2:45、4:32―37、Iコリント10:16、IIコリント9:13)。第三は **共にパンをさき** である。これは後代の典礼としての聖餐(せいさん)というより、日常の食事の中で主を記念して聖餐を行ったのであろう。第四は **祈り**。新しい共同体にとって神との友情が生きていること。

参考文献 小野静雄『使徒の働き』『実用聖書注解』(いのちのつばね社)、Polhill,B,Acts (Broadman), Witherington,B,The Acts of The Apostles (Eerdmans) .

聖書 使徒行伝2・29～42

タイトル 教会誕生

暗唱聖句

一同はひたすら、使徒たちの教を守り、信徒の交わりをなし、共にパンをさき、祈をしていた。

使徒2・42

目標 地上に誕生した教会の様子に学ぶ。

導入

(長谷川)

6月第1聖日は何の日だったか覚えていますか。ペンテコステの日でしたね。弟子たち120人がみんな祈っている時、神様の約束してくださっていた「聖霊」が来てくださり、みんなの上にとどまりました。弱虫だった弟子たちが力づけられ、イエス様のことを大胆に話せるようになりましたね。その日にイエス様を信じた人が3千人もあり、ついに世界最初の「教会」が誕生したのです。今日は、その「教会誕生」について学びましょう。

最初の教会の大切なメッセージ

ペンテコステの日に誕生した教会第一号は「エルサレム教会」でした。「教会」とは、建物をさして言うのではなく「主イエス様と呼び出された人々の集まり(エクレシヤ)」を意味しています。第一号の教会は、立派な十字架の塔のある大きな会堂の教会ではありませんでした。特別な建物はなかったのです。あったのは「大切なメッセージ・教え」でした。

それは、「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエ

ス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい」というメッセージでした。イエス様の十字架の救いを信じなさい、という素晴らしい教えです。教会はこのことを信じた人たちの集まりなのです。十字架以外に救いはないからです。

最初の教会はどんな教会だった？

悔い改めて、イエス様を信じて、洗礼を受けた人が一日で3千人ありました。驚くようなことですね。これは、聖霊の神様のお働きだからです。信じた人たちが始められた「教会」はどんなことをしていたのでしょうか。その中身について42節に書かれているのを見てみましょう。

①一同はひたすら、使徒たちの教えを守った。

「使徒たちの教え」つまり、聖書の言葉を聞き、いつもそのお言葉を守り従っていました。聖書の言葉をとても大切にしていたということです。

②信徒の交わりをしていた。

「信徒」とは、救い主イエス様を信じているクリスチャン仲間のことです。そのみんなが、お互いに愛し合い、仲の良い交わりをしていたということです。44、45節を見ると、それぞれの持ち物が共有され、必要な人のために分け与えることもしていました。お互いが本心に助け合っていたのですね。イエス様の十字架の愛で結ばれていた教会の仲間です。心から愛し合えたのですね。

③共にパンをさいていた。

「共にパンをさき」とは、「聖餐式」をあらわしています。イエス様が十字架にかかれる前、弟子たちに、「聖餐を守り続けなさい」(ルカ22・19)と命令されました。何のためでしょうか？イエス様の十字架をいつも思い起し、感謝するためでし

た。初代教会の人々は、この聖餐を重んじていました。そして、2千年近い年月がたった今の私たちの教会も、「共にパンをさく」ことを大切に守り続けています。それは、イエス様の十字架こそ、最も感謝すべきことだからです。

④共に祈りをしていた。

最初の教会の人々は、いつも心を合わせて共に祈りをしました。たくさんの人々がイエス様を信じて救われるように、クリスチャンが祝福されるように、と心をこめて祈っていたのです。あの素晴らしいペンテコステは、120人の祈り会から始まり、その祈りを教会はずっと続けていました。

まとめ

最初の教会の姿が良くわかりましたね。「すべての人に好意をもたれていた」(47)とあるように、教会の外の人々にも「教会はいいところだなあ」と好感を持たれていたことがわかります。そして、どんな救われる人々も起こされ仲間が増えていったと書かれてあります。素晴らしい愛の交わりに多くの人が引き込まれていたように思われます。

今日のお話を聞いて「あれっ、ボクの教会、私の教会もエルサレム教会と同じみたいだ!」と思ったお友だちが多いと思います。本当の教会の姿は変わらないのです。変わってはいけません。私たちに伝えられたメッセージと本物の教会の交わりを大切にしていきましょうね。

(友よ歌おう21)



牧羊ひろば

「わたしの小羊を養いなさい」

芦屋川教会

芦屋川教会の教会学校を紹介いたします。奉仕者は現在、幼小科4名（内、見習い1名）、中高科2名、フリー1名です。

一、礼拝

主日の午前9時、まずみんなで礼拝をささげた後、幼小科と中高科に分かれてメッセージを聞き、分級をします。子ども

もたちが新しいお友だちを誘ってくるようになり、次第に子どもたちが増えています。最近、家族で出席するお友だちも導かれました。

二、「ワークブック」子ども聖書日課

の活用

昨年より教案を『成長』から『牧羊者』に変更し、分級で「ワークブック」を活用するようになりました。子どもたちの生活への適用という点で、とても役立っています。また、「子ども聖書日課」を毎週全



▲教会学校礼拝

員に印刷・配布しています。個人のデボーションのためだけでなく、家庭礼拝のためにも用いられています。毎週「子ども聖書日課」を楽しみにしている中学生にインタビューしてみました。

Q：「子ども聖書日課」を使ってみてどうですか。

A：私は、クラブ活動のため教会学校にも一般の礼拝にも出席できない日が続くと続いているとき、「子ども聖書日課」をいただき、毎日その日の聖句と解

説を読むようになりました。自分で祈りできないような時も、最後にその日のお祈りが書いてあるので、それを自分のお祈りとしてささげることができました。教会へ



▲ファミリー・キャンプ

行けない間も、自分自身の信仰を守るためにとても役に立ちました。

三、ファミリー礼拝

昨年度より、子どもたちへの信仰の継承という点から、教会学校を休校して、子どもも大人も一緒に礼拝するファミリー礼拝を年に数回行っています。子どもたちは親や教師と一緒に前方の席に座って礼拝をささげます。また、母の日、花の日、父の日、敬老の日、幼児祝福日等には子どもたちが前に出て賛美をささげます。歌声が礼拝堂に響き、教会全体に活気と希望、和やかな雰囲気をもたらしています。

四、ファミリー・キャンプ

昨年10月9日（日）～10日（月）の連休に、教会として初めての試みであるファミリー・キャンプを行いました。教会で主日ファミリー礼拝をささげた後、車に分乗して出発。甲山森林公園でお弁当の後、オリエンテーリングをしました。各ポイントではゲームをしたり、クイズに答えたりして、ゴール

を目指して頑張っていました。二日目は山登りをし、頂上でお弁当、ゲームをしたり、語り合ったり、のんびり楽しい時を過ごしました。

集会は一日目の昼と夜、二日目の朝の三回で、『牧羊者』の『夏期学校教案』を用いました。普段よりも分級の時間を多くもつことができ、ワークブックをもとに子どもたち一人ひとりとじっくり向き合い、祈ることができました。

賛美も子どもたちのほうから次々とリクエストがあったり、礼拝の10分前には集まって大好きな振り付けの賛美をしたりと、子どもたちは皆伸び伸びとキャンプを楽しんでいました。

適当なキャンプ場が確保できなかったこともあり、教会学校生徒・教師以外の参加者は少人数に限定せざるをえなかったのが残念ですが、神の家族であることをまざまざと実感できるファミリー・キャンプは大好評で、それぞれに喜んで参加、奉仕をしていました。

五、ジョイジョイクラブ

03年4月より、主日の教会学校に出席しにくいお友だちも教会に来ることができるよう、教会学校の他に、第三十曜日の午後に「ジョイジョイク



▲ジョイジョイクラブ

ラブ」を始めました。まず礼拝をささげた後、クッキングや室内・室外ゲーム、季節に応じた工作等を行います。

子どもたちに好評でしたので、04年からは第一土曜日にも行うようになり、月二回となりました。現代は、一緒に遊ぶ仲間や空閑、時間がないと言われていますが、近くの山に登ったり、芦屋川や

とり、潮干狩り、水遊びをしたりと、神様の造られた自然に触れ、

お友だちも奉仕者も時間を忘れて一緒に遊んでいます。

中でも毎年恒例になっているのが、夏休み中に行う「花火の集い」です。まず教会で礼拝した後、教会前の公園で花火とスイカ割りをします。夜ということもあり、保護者には送迎をお願いしているのですが、快く引き受けてくださっています。中には子どもと一緒に参加される保護者も数名あり、保護者と接することのできる貴重な機会と

なっています。何よりも子どもたちを安心して教会に送っていただくことがわかり、感謝しています。

お友だちがジョイジョイクラブから教会学校につながるよう祈っていましたが、毎年教会学校に来るお友だちが少しずつ与えられています。今来ている子どもたちの心をしっかりとらえて、み言葉の種をまき続けていきたいと思っています。

六、その他行事

イースター買物ごっこ（配られたコインで、おもちゃ等を買います。ダーツ等のゲームコーナーもあります）、春の合同野外礼拝、花の日慰問、クリスマス（近年は保護者も多数出席されています）、他。

七、今後の課題

子どもたちへのさらなる伝道と救霊、教師の研修と成長、新しい教師の育成等が課題です。「わたしの小羊を養いなさい」と言われる主のみ言葉に、教師一同心を合わせて忠実に従いしていきたいと願っています。

（浮島康江）

▲クリスマス会



例：●一週間もしくは一ヶ月にまとめ

て配布。

- 家庭礼拝に使用。
- 教師が聖書から質問を付け加えて配布。

☆ 『子ども聖書日課』を使用して、気づいたことはありますか？

☆ **その他。**
（使っていてよかったなと思うこと、
エピソード、など。）

E-mail : berachah@vanilla.ocn.ne.jp

『牧羊者』二〇〇六年度第Ⅰ巻をお届けできますことを感謝します。執筆者の方々には、教会総会などの諸準備の中を執筆していただき心から感謝いたします。

今号から一色刷り、ワーク解説は別刷りで付録となりました。また、「教師養成講座・旧約聖書丸ごと早わかり」を、篠野潤一先生が執筆してくださいました。

好評の「子ども聖書日課」を、各教会で印刷しやすいように組み換えをいたしました。大いに用いてください。

今後も「牧羊者」が大いに用いられ、各教会の教会学校が祝福されるように、引き続きお祈りください。
終わりに今号の執筆者を紹介いたします。

終わりに今号の執筆者を紹介いたします。

研究資料 足立 宏 石田 高保

ワ
ー
ク
木村 純子
鎌野 幸
長谷川ひさい

長尾 秀紀 加藤 清 上森 恭子

高斗、藤井 谷一 洋美

中 高 科 小 岩 裕 一
フ ラ ッ シ ュ カ ー ド 土 屋 直 子

フラッシュカード
み言葉カード
土屋 直子
陰山 恭子

子ども聖書日課 小野 淳子

また、監修をしてくださった鎌野善三師、小岩裕一師

澤惠師、打ち込みをしてくださった加藤清師、藤井正

青木美恵子師、楠淳子師、多田豊子師、陰にあつて

をされたベラカ出版の方々、印刷会社の菱三印刷さん

（長谷川和雄）

心から感謝いたします。

（長谷川和雄）

電話(〇七八)五七六一三九六一
*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み

電話(〇七八)五七六一三九六一
*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み